



芭蕉翁附合集評註 上

^ 5
1060
1



明利
誦 10,0
卷 1-2

同
同
同

依 借 の つ け 句 を そ の り む と 同 じ
も の せ ば 若 し 意 に 相 の つ け 句 を よ む
な し 若 し 意 に 相 の つ け 句 な ら ば
志 の 多 少 が 何 ら け り 多 少 附 合
多 少 の り ち だ い あ ら じ 若 し 意 が
い さ を 大 小 有 り け り け ば 石
分 ち の り ち だ い あ ら じ 若 し 意 が

おぼがつゆよさの附合集をるるばよ
ちちあささびつひふ志の評注はか
たふめままこころんが翁をさつるといふ
べしかりが依潜よ老くふさとは
まさをひらきささくしるべしのが辞
たまさくどりくらひかかるとうす水
心を固くささるち用を車にけり

芭蕉翁附合集評注上卷

猿の社

二十五条曰猿ハ癡白の余情と氣色の
面ふくなるやうに其危し猿の多から
持てる猿のころるや何らぞ
酒債尋常往不在
人生七十古來稀
詩のききむどまをむさなる酒債ハ
冬 湖日く水く馬よハスル 鯉コイ
癡白詩商人といひ酒債といひ詩人酒

74
1
後の何れさぬをのぞくをうけくを
漱と音ましく用ひるよのまゝの裡と漢
句のまぎらつくりてむせ句の余情を
何らりたりはれどとれみなり一粟の
依措とて又一祈あり公卿いさぐせ凡
のまゝ面目をばら小ざる時のたゞいり
ハ常格とまぎら
霜月や露のつづくあらびれて
冬の初日乃何れありりて
は銀ハとホ人のかごとまゝる名高き

秀逸ありおのりき二句の間ふらぐ
めし升とが冬の白位解ふふの誤く
あれを解する時を却て并二条は前
條といひるよなき注とつあぢく大い
ものぬといふいひていひて解た
いひぬらるものよ何れ口をばらだか
あたらむたがよものさり公卿もこのあ
の乃依措ふらりてはめて正凡
のまゝ的をばらぬらるよまゝのまは
銀何れき小とらまゝる凡のまゝ

あしるバ巻中まゝ古流の体身は酒
あつるるり何れもく結の意よ比を甚
何らきもの之はてその流體のつくく
あつらびあつくと句づらめは酒はなるふ
韻字^{イム}ふてもあつる何れあつりりやま
ひほしたるるれを流の体身とい
ふるもく流才三ふまはりその三体
何れもりわが師軍更平きけりる有
るれは白の天りてかちあつたもの
あつる流の地りてのまゝるりをつり

あつりり才三ふまはりその三体
どる流のまゝるりをつりあつりて
あつるるりをあつるとあつるものあつるがま
とあつるるる韻字をまゝるるるりて本
式とて本式のまゝるりあつるるりあつる
まゝるりもの、あつるるりあつるるりあつる
のめくあつりりやま或はあつりりるるあつる
まゝるりあつるかちあつるるるあつるあつる
又ハあつるるる風吹のあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

脈といふはかりありし節くすりををつらねる
あふ節くが本式あり申すもてふつて
らむたのどをさすら用ゆるりハけかきも
とも節くがあらありしハ三のたの節
たりの節の假名ハ行新説のなるど
ハるの節ありけしハ草天地人の
ことしををまらざれば脈才三よき
はれと極式といふものハかゝるをくかく
はるをくらざるものよてかゝればむづり
かゝく脈ありかゝらざればみづりこ

世小宗と通あるといひく依階を言ふ者
何よつけの固ふつけはる秘傳とつる
をつらりく人を採びくはるるりハ
人成けりて價をむさぬらむとの
志りざたままるとハ依階の傳と秘傳
とつらりハたきものこゝハあづらぬ
りありともあらざけしハ草のよを
一たりのの秘傳のやうよふ者あまきを
こがまーはふひつ
檀 竹之雨ヨを人系のやどりハ

糖 一つくね 口とつてとゆく

花句 旅 釜 雪をいのちとまゝの風 粒
の 旅人 小ち 旅く 糖よとつてとゆく
おとやう 乃けしきをつけたるるり 小
行 神の 旅あり

時ハ秋を 糖をこめ 糖のつと
厚をともね 小 風 の 月

花句ハ送 小の 句 あり 時ハ時として 秋
の あり 小 ね ち とき 時 不ハ 不 大 和 西
此 ゆ 一 き 凡 何 ま き 一 春 糖 を う け て の

旅 小 水 ば き 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
つとも あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
ころ 侍 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
わが 身 生 涯 旅 あり 旅 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
とも 森 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
身 を あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
な あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり
ふ ね あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり 小 あり

江戸 様 ころ かな あり あり あり あり あり あり
糖 糖 の 両 相 あり あり あり あり あり あり

公おハかいつ〜江をさだめんとする
しほどの人なきは時あるの處へ
江をば田へい出ぬふらむ〜い〜る
を時ふ様と志をり〜る他へ
るの何いさつを〜け〜い〜し
そぬふか〜り〜るとありこれも
たふき〜ば〜ら〜は〜解〜が〜
まろ〜ぬふ〜陰をめもよおの陰
一 相わろる〜子〜るひ〜むれ
きこえ〜るま〜よ〜くわ〜く解〜るふ

及ぐぬ
時あるふ^{カキ}溢かりをむるの處
火煙のほふを〜人
桑向君ハ産を〜、出りぬ〜も
門の溢を〜り〜ふか〜し〜ぬ〜時由降
度〜よハ君が〜るにゆ〜は〜人
をたの〜あむ〜人た〜ら〜る
ふ紙さ〜れ〜より〜い〜ゆ〜も〜る
火煙にはまをた〜る時海をたの
みぬ〜い〜ろ〜るあり〜もた

か身彦ちゆめと早下
つぐとハ滑船コツケイのこもバ

芭蕉フナヅミ分フナヅミ句フナヅミ小フナヅミ舞フナヅミかほり

月と紅名ホ成酒のこも

舞向ハ公羽の 老彦昭カか
ぬをささくおくるまといつるをささく

ろの向ふさる舞かへつるささくや何の
古酒の一軒をれカ他意いふもささく
がく一旅の月とぬまハ何のささく
たぐ風流カなつささく一洒のこも

て何ささくものありとささくりけてかの
芭蕉舞かへつる句をたぐ舞かへ
舞よぬをささくおくるまといつる向るを
句のささくをささくかゆるるを不向
のこもバよささくたぐへつる芭蕉舞かへ
つる何やまのまつるたるあさむし
つよ後あまらちきつてハやまらちあれ
どけなく何のを見ささく強シビりたる
ささく何ささく

山宿まぬらとむ西川なむらバ秋の巻

花蕉とあつふ風の破笠

葉白ほいさつふく西行西行よてまよば
 ち宿すぬらとむせと向うけるよや西
 行のめきそもきけりあまてはな
 花蕉とやつくはふ破水安きさう
 ぞけぬる者よてさうらとさうら
 る旅ちかり花蕉とふ風の破笠さ
 へるひびぎゆふやち——葉白も花
 の葉よ西行さうらやあまのつゆを
 ての化ちかり

花の咲かたながら草のさぬふ

秋 子——はるく 篠のくづをれ

葉白はふるさつをあつふる他は花の
 枝が像^{イミ}像^ミなる我見く何れ水は人を
 一々世子用ひひめばよ人のかいらお立
 て園の^{ミヤコト}庭も何づららむむをき人
 おなるをるおのちふかられくせ
 水けぬふ花ぬふはちを——からせや
 されどろの人よこりくはさるく何れが
 たきちんよこそとたぐひなく^{ミヤコト}

一たるあるをかくやけく白つらりて子
のなぬふ花の咲くふを秋すしるあつ
うひなまねねハワガガ我人のちりみる
におとろきてこいれい 和入くわ何
秋ふ志ふる 蝶のみる 梨もあきく
づをゆるる赤もあきくこといへと辞徳
謙正のことバあり 他者の句をつくる
十七字十四字の間ふおぎりあはれく
ろ何りく口上をのべらめ 後守
子うくあろをとく 後よ

師の操むの 拾ハむ木の葉が

さく したふおの 秋は 四十一
みれ白ねともみ古洞あふ小がきこえがに
解くはたりとも 無念無のり
霜の宿乃旅藤は飯屋をまね
古人がやう乃おの本うら
みれ白けききお乃者ふんをまの
もたのくく時あうらぬ飯屋をまをまの
らをもいふのあばやういふせく 杉が
きむとあいらりたるこまことみ飯屋

たをいふさるるふハ何れぬどきとておのぬさる
ものもたのしきうあはれをいふくいのど
たのしきぬはさるよその詞をうけてさる
のきとていふくぬたがひなれたも
ろきふふくく何き古人もかふるな
つしきあふふくくあがうくをき
るもこそきくくたれとたりよ何
がくかやのく何れくくあはれ
れど何れなきあけをはをのべくるもの
あはれむのくものがたりなきふくくかふる

るハ何れぬなど深氏物語をよみたる
あはれさるるなり

甘るよよ葉がまどへ五三の

竹立もくくたやさく 庭の卯の音

み花匂のつらりつてぬくくきくくか
くきくく強てとらば甚るよおのの葉はふ
ゆきぬよ道をあどりくく五三白雲を
くくきりぬきやうたをいふくくく
らむりぬはたやそのあふ入くくあがみ
なをくくバ垣根の卯乃ら花ハ雪ヨリと

何やまればよろづねもろく位なりたれば
旅のうけをもちまじきむさわうりし不
免ころころと舟の花乃雪とこのあは
ど舟の音とつゆのいまどすぞ依借
よそかくつろり水かや何ぞ水かまれば
潮の怪臭もくようぬことばるりまべ
く家の白をぬがとてユキ女ありと
おぐえころをうつすり吉酒よらうら
ぬ白もたなくころ
めぐりや旅業の中乃公羽中

潔ツギ士のツギ丹ニ彩シとくツギ身をツギまツギるツギ冬ツギ梅ツギ
舞白と旅業の中乃公羽中をこいつける
風情何となく白上たふふ冬梅寂寥土
の丹彩ふゆをまじおる舟のゆふをほいさ
たよ旅業
旅業の業をみまじるツギ眠ツギ
舞白と旅業の中乃公羽中をこいつける
旅業の業をみまじるツギ眠ツギ
舞白と旅業の中乃公羽中をこいつける

中をふくくはまぐしの旅ゆつらんゆきむ
がろれぬど神もほろろびぎ旅ゆつま
あふりもも見えぬを志ふころといひ
たうけめたるあろえぬを水をけく
いやく左様もぞらぬ旅森のまよはたき
小やつれてまよハ眠をきらきぬどのこ
あけふおぼさむことこたふ

糲飯ヤキや伊ら吉の雪ユキ山ヤマ遊ユキき

砂サきりりりりり乃ノ旅

五光句けききおくららの旅ハ糲飯も伊

うら吉の雪山遊きむきらあくユキ遊ユキき
ぬむぬぬぬりきまのうら又ハたをキキ
くもきりらむと傳人の旅をけりりり
あろをけりりりもねむさのみぐ砂
をふて来りりりきりりりりりりりり
るねありまをきりりり五光句けきき
まよがぬく或ハ向ゆりりり或ハ人のまよ
夜ト或ハ人の詞をかつていやくちよハ
あらぬといふねん五辨八辨の夜何れ
ど五光句ハもと流およて何れをいひ

出むもはうら水ぎ 旅ハる水よるまゝのお
たれバ人のことバふかぎりたのきぐめくその
時くのうらまよまごはまごバ子辨ハ
辨ハ九辨十辨何りてもまごるんぐらぎ
おどまごかごるまおたごハぬんの人よあり
ふまごけてまめまごものたのきバ何るぐち
にかいるべうらだ
いろくのなもむつや春の料
くくく 條のるままはめぬる
你のまの辨の紙たのり五葉句紙も何り

のまのれ春くるし評をまごだりく何なら
けしなふ二十五条ふはり何り
此君すわぐ宿せま 旅ハ紙を
え 旅くかをる 風の 甚志
五葉句ハ公おま君すらく 子か者を卑下
したる他まぬらく 旅ハそれ紙あり
さつしく 西宿 一まぬりく 水バる
免くかやの風も甚志の涼 甚志
ろしほめたるなり 風のたきまのつ
ぐりたるハ依借あり

おらりお林^{カガ}たよあまのよ化^カま

田^カ植^カとも^カに^カ結^カ乃^カ船^カ起^カ

桑^カ向^カの^カ田^カを^カ田^カ家^カの^カと^カの^カめ^カくる^カち^カろ^カの^カ

ろ^カの^カ船^カた^カぐ^カその^カ地^カを^カつ^カけ^カり

る^カが^カぬ^カも^カ志^カづ^カら^カよ^カや^カバ^カから^カび^カす^カや^カ対^カ面^カ

酒^カ志^カの^カな^カら^カよ^カは^カは^カど^カろ^カの^カ月^カ

け^カ酒^カも^カ定^カた^カぐ^カよ^カは^カ何^カら^カど^カ一^カ房^カが^カぬ^カの^カから

び^カた^カる^カを^カき^カつ^カけ^カた^カる^カ李^カ杜^カが^カ紫^カに^カ秋

宿^カ園^カなる^カを^カ酒^カ志^カの^カく^カる^カ形^カら^カむ^カ船

の^カけ^カり^カか^カく^カた^カる^カや^カら^カに^カを^カを^カる^カ

志^カる^カ感^カして^カみ^カを^カば^カや^カ并^カ流^カの^カ田^カ植^カ唄

必^カ之^カ何^カら^カた^カ免^カむ^カ不^カ存^カの^カは^カど^カれ

桑^カ向^カの^カ結^カ人^カよ^カあ^カあ^カゆ^カく^カ并^カ流^カの^カ田^カ植^カ唄

を^カき^カり^カを^カむ^カと^カ船^カの^カ并^カを^カと^カゆる^カよ^カハ^カえ

後^カた^カ何^カら^カた^カむ^カとい^カふ^カや^カの^カ友^カふ^カく^カみ^カく

わ^カが^カぬ^カき^カ持^カた^カり^カ船^カの^カ何^カら^カと^カむ^カだ^カき^カ衣

後^カも^カた^カあ^カら^カば^カ不^カ存^カの^カ罪^カを^カる^カる^カよ^カハ^カせ^カめ

て^カ必^カ之^カあ^カり^カとも^カ何^カら^カた^カ免^カむ^カとい^カふ^カと^カろ

を^カは^カる^カと^カよ^カな^カき^カと^カか^カけ^カり^カは^カ船^カを^カ世

小^カ對^カ面^カとい^カふ^カ并^カ流^カとい^カふ^カよ^カ不^カ存^カと^カ對^カ

田舎はらむぐくけりしるそと
見とばやあか子をちぎる彩の如
るの葉をさきふをらむゆづね

これも揚子附くたのみのゆづねの
下さぐみ何るべららぬあとの
いつる田舎の何れさ海見るがめ

時ぬくや花まで流る松のま
宿たふた鶴をとむたわらま

みせ白ふくやうまきとゆ花の流る松のま
たを見くまきまのあつてはらまがれに

何ひあらむぐくけりしるそと
東のふとつよころをあらばさぐよ時ぬて
やたふれど又いまがれがやしもきらゆ
ましくは度く時ぬま何れ松のま
損トても何れまなふ松の流るま
はゆりくおしげたふるはまがれし
のくをさひたまいげりやうま
らむがたぐーがれやのかく松のま
たき流る赤子を時よたとくかくるま
鶴のよるべなき者たよめらふ君い

草のめき人ありて比喩しく何いさし
たるなり

奥底もなきて冬木の梢ふ

小春小首のうごく三ノ虫

あれも何いさつの葉白やく君と赤の奥
底もなきて冬木の梢乃めくまじく
まじくも見えまじくやうにこそあといふん
まじけて候のわが身をケムジヤウ謙譲し三ノ虫
のやうなるは方も君が何り小みの小春
は何くまじりふ小首を詠まるとも詠く

わきもけびよ梅より奥のそ敷枝

よ赤の湯ふ流る雪のひよ鳥

葉白の梢よなるとよ山本といへるころ
まじく梅の奥なるそ敷枝あはれごと
は凡流ふ何やうりうりまきもけびよの
何いさつなり流はけびよといふは
よ赤の湯とつけたのまじり身をひよと

わが梅アイサシ枝サシの度葉ハ

見カケヒふ詠く山ハ茶ハ乃ハ花ハ

あきも均不附めくはるるそちあ

梅ふえく日永し様とくり

東の窓心乃 虫葉よつ

朧白のみりし山のやまさあつむ
とくしり何りく花や咲べきといへる若水
院まその清 智のこことバをかりて梅の
花もちりそし様ハまご候むはちあは
日をいらよらんちむくつあつ方之 ぬハその
時分のやうんそかふ何りくく
かきしあはは新のぬちり

川くぐくと復の花は 神ふちる

ひとり葉を 摘みぬのひつあ

まこよは ぬちるい葉白をたまけるよ

からましくぬさよ何らむさなごく ぬの葉

トかきけ 白のめくちるをさしつぐと 復

の花乃 神ふちるハ葉のひつあ 葉

摘ならで ぬふつとぶやひしむくつ 葉

つぐくふよくたすりくちくし何り 嘆を

るは 何まり 何ぞ

樹 ^{ツクラ} ちよ 葉ふく 若者の友 荏

秋をこゆるはらぬのけしけ

こゆるはらぬのけしけをうけけるまがら
うまのけしけをうけけるまがら
つれづれにけしけをうけけるまがら
つれづれにけしけをうけけるまがら

浦をこの岸例所と見く草の穂をい
西日とつよはなれりゆるゆらぬのけし
をうけけるまがら
をうけけるまがら

文鳥の羽もかいつくろひぬゆづれ
ひと吹風の末乃葉まづまる

ゆも名有るさ依借あるは白き人乃
よくするふちりるまがら
の法まづまるたごのふよとあるま
ことよ正風のまがら

市中ハものまらひや夏の月

日者しとつれづれのまがら
かまづもけしけの依借まがら

たぐ正凡の的くあれバクをまじりまをこ
ちよきごと首の月へ涼しう何いごま
布中のもものるむひをらば暑うらめか
るここのをたぐへおお白をよく見さぐ
欠くもやめく後家はひきさぐだ
涼ししこつふ山家の旅をれ
灰汁桶のややとらまきりぐ
使りまきりく音森さる。秋
ひれ白^{シヨウ}葉く^{シツ}蕪くの麵を見く旅寂く
莫くの^{ロク}顔をつけり灰汁桶のやや

落やめバきりくまの出すまつらに健
うまきりく音森さるをれものやぐり
たあるぞ
芽出より二葉ふさなる柿の^{サキ}実
畠田の花ちかがる卵の花
翁たまが柿柿をふ滞るあの時依
借あり葉白ハ柿柿舎を顔さる
旅はもや艾地ちり
さる葉の儀も何まや生大根
みけしん籠る小定の^ス襟

花白き葉ふ生大松のとり何とをう
た化ありいづのも大松もき葉もきくら
むかる家へかゝらむお定はとめてふぐ
らたは煤の流くりくる山内さうりか
の古家と見くる流く

春風や葉のゆゆ 水の音

陽あいきむつ花乃らふぐち

春く二句の間う何ふゆり

葉種干き世の階やゆあ涼

いん ^{オコ} 花のたな

あろろこふ二句の趣を墨とバ都を二三甲隅
たる左交のさふとふたふれはむたのふがたハ
ちひさきく川ちがれささく の葉茂りた
てたハ山あふべー 家のをき世ををぬて
葉種干たるよその世はたたりぐあぬ
まわりて写す人の家内の涼とぬるきは
やがてたのほきまわりお宮のちらつくを内
の子ども乃見つりくく 花ゆくと葉ゆ花
るれ葉がけふ咲るちあら

蠅 ちあらふたや秋秋の日散る

首もくくら 吹 帷子 乃 絞

時々のつげあり

新妻はつぎとまゝ 死ぬ首カド金デらふ

まぶ おぬ屋の定まよりあり

係のま絆の恨まゝくわくしの恨をく

いひよりいへりあり

帷子ハ日くふまきまぶ 賤モズのま年

紐モミ一升を 縮のこごじ 足

かゝびらのまきまはくなるは 賤モズのま年

一きり子て 於々ハようやど 涼しきまぶ

恨もろの時分をいへまゝく 縮りり時をう

けまゆりけて 縮のこごじ 足モミ一升と

ゆく在ふの根絆をのべあり 東山のま

れ公羽のはらりいへり 向をまゝく

むべあり

雨ツ佳ルのれくまハ海ゆく 望み

秋暎のやまゝ 魚もまとりがく 望み

ハ何まゝく 海子何まゝゆく 時粟の穂は

中よりぬつて 公モ露のかりは 何けた

らむハめづましきとちやとむすべて附合ハ
二句一首の奇と見るをいといハはは解
もが一首自りくはとさるこ

残る故小給^{アヒ}きてあゝ秋きくま

餌^エあぢがらふ足さるる深^{ハシ}籠^{カゴ}

時ふと場ふとの籠なり

秋のふれ先くふら屋を

と秋小森やうう秋に森やうう

係の草新めて甚^{シヤ}洒落^{シヤク}の籠なり登

句ハ先くも秋晩の海邊やく人里

まゝく家も見えざ多むぐら屋だうりやう

さびくはつと一た何りさよあを凡^ヒ

籠のひより旅と見くかくハつけるるに

つら豆の花咲ふりりあゝの縁^ヘ

屋の水^{クサ}籠^ナ乃けしる^ニ溝^{ミヅ}川^{カハ}

場ふらるがぬ一正風のさいたる中なるべ

猿^サ籠^{カゴ}ふまれとるおれ乃松^{マツ}セ^シ海^{ウミ}バ

日ハまきりれど志づうなるる日

登^{ノボ}句ハ猿^サ籠^{カゴ}の甚^シ何^ニめ^ス時^{トキ}の白^{シロ}なれはは

その猿^サ籠^{カゴ}の甚^シおれのれにもれくおれの松^{マツ}家^カ

まじさかめーとつよこころをらむりねもろ
のころをいつらひたる。執り

第三の歌

詩何きむど年をむけざる酒債は

冬^{ホコ} 湖^{ニガ} 日^ヒ 水^{ミヅ} しく 馬^{ウマ} 小^コ 加^カ 馬^マ 裡^リ

干^{ホコ} 逆^{ニガ} き 妻^{ウメ} 小^コ 糸^{イト} を ぬ^ヌ る さ^サ ら^ラ む

瓶^{ビン} の 形^{カタ} も つもめくこの時ハハまぐさ風ハ
入^イ らざりし時^{トキ} なるハハのちハハ風のささ面^{オモ} 目^メ
を^ヲ け^ケ ら^ラ 水^{ミヅ} くる^ク る^ル 時^{トキ} の 依^ヨ 借^キ ハ 何^{ナニ} び^ビ ぐさ^サ 水^{ミヅ}
瓶^{ビン} 古^コ 洞^{ドウ} とも^{トモ} み^ミ 奈^ナ 栗^栗 狎^狎 とも^{トモ} つ^ツ 小^コ 白^{シロ} 三^三 葉^葉
句^ク ず^ず り^り 牙^カ 三^三 ま^ま ぐ^ぐ 漢^漢 の ま^ま ぐさ^サ よ^よ つ^つ り^り た^た
る^ル 乃^ノ り^リ ま^ま べ^べ て 古^コ 洞^{ドウ} ハ 漢^漢 語^ゴ 詩^シ 債^チ ち^チ ぞ^ゾ を

きくつふるをめぐりきくつふるのよきたり
ると見えたりは水どけ花白ハ甘く角が世の
待哥に何をぶ人をほぎけりたるよて紙
三もろのころ何れといつりらぐあらむ
ゆ雪乃とともも薄ととくぬる
雨相ふまのころ紙紙紙のめ
聖と葉まで尋る蝶の羽をんく
家くの冬の日ほ解よまづらくゆづる
水仙ハ見るるを春に泣たれめ
窓の雨目平ひらく葉且

赤猫小のら猫通る鳴りびく
花白ハ水仙ハ冬のもれなきども冬のいそ
ぎよ見るるもなきて春ふなりてころな
が欠たきといふころスハ紙ハ花白ハ葉且の
ことばきなりしを早春と見らく葉且を
つけるたたらた牙三ハたきと一葉の
りふりたりし猫の意をつけり牙三
の指しやうみふがのめ
梅たえく日長し様いまぐら
葉の窓乃虫葉ふつら

巢の中ふ巖の顔乃益びぬく

吾白狐ハ先ふ解したる所り之牙三八ヤハ
ア狐の坊ふよてつけまうも吾白のふふ何
らぬよよつりたるもの之牙三ふかざらぬ
まをく附白ふ三句のわくめを牙一とま
ふ山灰やしらに総とハ思り水まで
雪をまうくなきおまがらの松

海士の子が鯨を告る貝吹く

吾白ハ此身総ふ居をがらま山灰の何た
たらたのよに冬をま忘水総を忘るだりめ

ありと之狐ハ吾白の坊所常のふまハ何ら
ぞおま一ろく住たろく何よもまたぐ
人あらむ雪中の寒おま像子うちぬ
おまがら屋の松ふ雪のかるをたかむ
るまぬもの者と見たり牙三八そのふ
をりたるよく狐の松を浦をてくり
あ海人の子らが見吹く鯨のまをを
告るりま之附合の本旨みるりめ
花の陰かこみの花めつらや
おくやたらむ屋は第木

七夕の八日ハもの、はびくく

吾向ハ何りのまゝなる新旅ハその始ハ才
三庭の公第本をおくや掃むつふ心
目見みおれ後然とくくたたる^ゲの又去
あり庭小毎^カ振の葉なごのちらぐり
て七夕のなごりを見まゝ風情才三小
く見えくりも花の陰よりくくさ
各人の心陰心をつくべ

^小傾^ゴ城^イゆきくちあぐらむまの暮
既^レ中^ニたぐり^ハか^レり^ノたきもの

吹まぐは袴のひどは何うらみく

兼向ハ其角ありか^レル^ハ人^トなり^テ溜^ダを

不^レ騎^キや^レ世^ノ路^ヲを^シる^ハむ^シづ^クぬ^ハ小^ハ土^ノ原

ち^ノど^ノ小^ハ書^ノ樓^ニは^レ御^ノ御^ノて^レ酒^ノ徒^ノ平^ノ美^ノる

そのを好くするおけ向何りまゝに^レか^レ水

が^レ本^ノ情^ノの^レ向^ノあり^テ旅^ノハ^レ吾^ノ向^ヲを^シ一^ツ擲^キ半^ニ

金^ノの^レ子^ト見^テあり^テ既^レ中^ニた^レき^ハもの

ま^レる^ハ驕^キ奢^ヲを^シつ^ク小^ハ才^ノ三^ハ何^ノの^レ引^キ牌^トて^レ既

中^ニた^レき^ハもの^トま^レる^ハ人^トなり^テた^レき^ハもの

け^レを^シる^ハ人^ト乃^チや^レま^レる^ハ人^トなり^テた^レき^ハもの

もらぬほどくふうぐんよその産
火をうつさるり 冬ゆづらひま
一季の侍より八重にたさすわく
吾白ハ俺人の内まねハその坊ふて火を
うつさる小堂の乃内唱の似海ひるをの
ぞく法宗の藝をつひ牙三ハ豊原家牙
とわあやして冬の間も我ある村の流と定
矢みをと三向までつげると
厚ぐぬも志づうふきけバからびすや
酒走ひたうらふはどろの月

藤 袴 注 衣 履 小 め で つ ら む
吾白 ねハ定平とまきつれく牙三ハ酒を
その産此家と見く産だらまハかくむり
衣履なるよ不自申あるものをとめ後
美斗一くつりりるとたむ水るん
まふとりたり
るたねく 粟の花さくは見え
いづそののソよ小啼 出る 禪
知 物くふ 街ら 顔面は月影
吾白 ねふうき定平一才三ハ四やゆの夕

飯時あり

淡^{フキ}やうを又習ひらよかつも子

市の子どもを送るる面布

日記もてふ立をならざる涼し

霞句おえなすし旅もろのゆふに才三ハ

旅ふよりなりく夏の暑た申み涼しむ

秋しなま

洗足み家し名につくきさうな

後飯あやうぶあむさ乃里

みるゆお階子の溢^{カヤ}をくま来て

きこえくるまをあらむ

薊^{カハ}株^{カヅ}や水田のふ乃秋のま

きるくる日ふ代うゆるる

衣^{フモト}う一^{フモト}株^{フモト}ハ馬乃きぐり

霰白田野の秋色画^{エガ}るるふし

をのくつるのりオここ

たりとつるたし衣^{フモト}うつ株^{フモト}ハと

の優^{ユウ}艶^{エン}あををゆらひ下^{シタ}るのきぐり

てと滑^{ユル}稽^キの詞^{コト}なそえてる

たるも後^{ノチ}何^ニもよく人のあぶ

年々を益小秋乃花かむ
膝小のこころ花世のあがら

音の月より森る人小宿り

桑白と主之の住カク無クに曲水キョクスイの宴ユヱ乃學マカび

とむしたむきたる之根ハ其夜ハ平家ヘイケたむ

かこりわゆるはあるりや二ハ村ムラでてまづら

たある河カハふこし一何ナニなりハひとり月ツキ小コ對タイして

比ヒ色イロがさなるり一わらふ其秋ハ凡マン俗ゾクのえを

くをこめて奥ウチ小コ深フカさをたるとらうの茂モ陸リク色イロは

きくもせぬさまあましくイナキ鳥トリ一森

入くる志小ものまがごとく

秋アキ赤アカハわざとましくめぬ首カビ年トシとみ

まがごとくお秋屋アキヤのやとくまのちり

馬ウマ時トキのこしくはしきキ極キョクのゆみ

五イチ音オン句ク根ネハ先マ小コひつり三サン馬ウマ時トキのり

依ヨ諧ハある一白シラきるあか

雪ユキの根ネをわくちるんば極キョクき

日ヒ乃ノ出デる赤アカの赤アカさあ

下シタ者モノをひく船フネ候コトふちあ

奔ハシ向ムカハ雪ユキをわの根ネをくいひ

冬のりたまゆ謹むに何まりあや
はまが流くよき句ハ解をむくまらばかいつて
第二義ハ後才三ハゆりつき及高き句之
公おこの句をかぬくまらみ記さくニ
まできまらるるがつひふこの巻の才三
おさるるるとなりゆき句ちのまらべ
西相ふ今ゆくやホシの星れば
笛の音氷るにうつさ乃橋
いと番^{ツガヒ}雀のまらるる松あり
桑句解くまら古調あるふ才三ハめでた

まら風流あり附きも又松あり
松放ふまらひ何げなるみまら
待ねも一ろくはゆるまら
ひくまらねる。折言ハ下子風を
五才句解ハまらえたるまら才三ハ
なまら句まらとまらむ解を
いとまらまら川まらるるまら
まらのまらしたのまらふがら飛
大松れたまらぬちまら
桑句解くまらのまらた才三ハ

ふる凡のたぐ中におのちらりておろろ
うたすまらまへうだま味とりむとまへに
こころまへまほらく口をつぐむのこ

牛原き村の内とぎや五月あ

すまふふき地 梅燈の花

一枚の葉ふこを森村へあへく

葉白りつづなるよをねたよとて

こころを春に新とてみて春の化光

ふかると白多し一紙に其ふよて村を名た

くさ梅燈の本なるもどり一才三一枚の

葉ふ唇くぐ心くめいし小原森にたる大木

の陰涼しうりぬだり

美木原水をあけ出く風の暑さ

野に松の蟬の鳴さるるま

かちそのおとまづりの人と吐く

葉白照つけたる風をけさるるの何つた

思ひやまへし紙よくたるりたて才三も不

の何よりあへく健置まぢの出るまへし

うはりし縮の種なるの想ふ

なるもたふきをぞ満池乃水

白登の中より 礎うちろ欠て

みま白いち代のゆるらなるをいりよめでたきら
ぎり之根ねもまいたどりーたがよひのた
れどそとあゝあゝのたをまよひつひたゆが
るめでたきち代ゆるらなるの園とてたも
て奈はぎとつよとろと才ニハ引持どて
白登ちのろちよりお出せる礎の新しとな
まじいをねきつろよ何しとひたり
ね凡小新酒をさるるおきり
月もかたむく石垣のろく

所の園垣るく 麻乃 飛くまろく

三句とも白き明らなり
ののこしはち一石の物
種はのまはちおくはわん
おくはわん—Tomowen
やんしちのたふたはあえんよのたやち
たん—おく—あはちのまわん—た
たん—おく—あはちのまわん—た
はん—おく—あはちのまわん—た
はん—おく—あはちのまわん—た
はん—おく—あはちのまわん—た
はん—おく—あはちのまわん—た

第四句の歌

二十五条よ曰四句めハ洗更大^ニ日^ノの地不^ク
軽^クも^シよハ禁句^ハ根才^ニ三^{まで}よ骨^折る^る
おと^しる^べ—^にや^り句^まる^るや^うに^いひ^たり^た
ま^ご一^卷の^赤な^化け^句ず^りた^どま^るお^もい^あ
お^一合^とハ^深—^たる^るり^そく

齒^シの^葉を^お持^人乃^ちち^よ負^て

水の^虫つ^たお^し—^何け^の春

才^三ハ^早春^小た^どめて^持さ^る人^あら^ば
齒^シの^葉を^矢の^よふ^けて^ゆく^そろ^ふ

ら^むり^ろの^持人^の獲^をを^何ひ^て園^のや^る
た^どよ^たく^すり^る時^小の^門を^おし^める^る
—^きも^もえ^又ハ^け持^人ハ^侍采^のた^ど
と^りあ^した^るや^うに^もき^こめ^いづ^水子^あ
た^らる^ハあ^くく^まま^のい^はま^まき^持采^を
を^つけ^る—

田^中の^葉乃^何く^も

お^もい^宿る^中道

た^らる^き附^合あ^り才^三ハ^持の^より^ぎ
の^持る^こも^かと^ハ思^ひあ^るま^ごを^おし^め

の中乃宿の世ふをいものかろふがよて何
がー尹ちどが妙のまさと見むとて思ふが
てこさをたるを一おの宿きしころりあり
りし田隠りのあふと来といつさかていさを結
といつ一字うゝ思ふゝひづるをいふ
かへる鴨かへらぬ鴨もはらさく

七シ曜ヨウ山サンをヲ出デくル月ツキ

たぐりしさをつけくも七曜山と山の石は
まゝ後何し山をさくもむむむ
水せきくも登森の石やなる思む

八ハチ登ノボ小コ鉢ハチのノまマ生ナりキまマあり

才三ハ在ふよろ何よりふて家の前に
ほろ川あり其川中石をたきく
くもくも登森あるはま之四句めハまくに
其何れをつけるものありかぐだつと
つけるも一神と

民タタのノ宿ヤのノけケぶブるル秋アキ風カゼ

才三ハたよ祭さとまりて酒をいふ
何ふななるがと者の月乃をやく出づ

酒竹管もちくほの糸屋をかりて月
を見むとならうちうちつれゆくき四句
め糸屋の民侮^イ害^ヒをさるるふりりかりも
月見酒もちりなどの抱無何るべきふふ何
らざるを養^イ平^イのち代^イあれごとそ糸屋を
かりて酒もちりあるれつらるるよて民の
かまどいふぎひひまりりといつる所をよそ
たるあかりかつは秋の豊^ト秋^クたのむをよ
るるべし名人の手^シ設^イ山^ア豆^ニ一ふ何らむや
村るふ市の仮屋を吹りて

町の申ゆく川松との月
オニのけいき村るふ建ふの吹そひいそ
のかりんを吹とらるるささるるいさゆふか
句めい庭の面へまどかろうぬふゆやうたの
はりげなりくまある。月うあといふさうよて
さだりりのち風大るもたちあちりて月
のてりさるるささるるささるる町中の川松と
つよよてる懐のりきいちる
旅人の風^シかきゆ^ニ春^ハさるる
えたもあろぬち刀のひさるる

府舎 七 三十五

才三よき句とまのこふ依借のをうか
たのるだく四句めこその人がらをける所
たりまじだく附句にかるるこひふあつ
くだく風子を念ふものつくものあらば
いつも附合に初くぶく依借るるべきを
風子を刀とつけたる依借の形しを
義あつてこそを志るべし
おーくまー

掃よとて消る雪をやがくふらむ
石のくぼみに墨を攪り

消くる雪をくみかく掃よとてがく
風流のそとを見て石のくぼみ
そと雪のちがめは結ぶ
たり

投つてき岨の編摺をかこめて

風を林火ふゆく月のぬぶの
まきこころなるあつたあはれよき句

野に屋敷の火運もゆきまはる

山の阿なうと乃 待きまはるなり
才三の春うにけよるひよて四句めよ乃

何ハナルきど花のづらなる。春もこの花を
まどろく季の初乃後句ハかくあるべき
ありあり

之般入ハたぐやぶりり見とつけて

るぐれとたがらハ第一もつあり

人^{ニハジヤヤ}情世^{ヤヤ}戀二句のつらふつくせり

目を冬ハえなく橋をうけゆ

門小顔出さ月の花せりれ

第一三いつなる。おふたハえなく橋とつあり

ハるりれどたどおしくにけハづーまる橋

を暮冬ハえなくとたもろくつひる茶

まごど四句めハるのこつりをこき春

ハる花のため秋ハ月のためよかける橋よ

て暮冬ハえなくたむらむとつける花の

たより一句のこころハ下をぬたの意

川ふ歌出さく物をこるはまこ

於凡にむりふ合相成吹立て

返ハのこころなる。生もの

はきこころもたうらむ

家^ヤが^ガ音^{シム}信^{シム}を春のよまきんえ付

工のたゞりに一はぐる葉のあ

こにハ炭徳の一辨あり家者後を春
のよきまきふとり付くる人ハ采^{ハメ}二商人^{ハド}の仕
合よくく買とむる采もは中ハあよめ
きまのたま

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

第五句の歌

雨佳見る空の月かこるなり

風吹ぬ秋の目^カ瓶^カ子酒なき日

古洞ハとくくからのけよをいふよりたぬ

お向ハ侍人などの空あふ^ド獨^ガ望^ガし月下

の霞をちぢめあふるはま之五句めハ秋の

日乃ちびーきに風も吹ぬ瓶^カ子酒は(なき

寂^{モキ}莫^{ガク}のりた之瓶^カ子酒なき瓶^カ子酒はよ

くつゆりなり

旅ハまに空をやつておる

三
記
小
輪
買ハむ月々海

四句めハ朝敵テウテキのためよれりははくひろふ
空を流しまぬらま付控えめはをく
まなかんしきる軍士のたもくげこ五句
め強よてある買べきに取ふ控買子於合
たのよになふ人あらぬ人ともくしり
七
晴山を出入りは月
町づらり粟のこげたる砂をけ
みきとえがしりしり
群くち人の之相ふしりつ

けの賀れいで面白や能ふが群

お白酒くくめがりてはげのしり
賀のささと見くる附合あり 老ラウササイ子シが
ちのりをふくめさるもあらむ
いつら鳥帽エガ子のぬげも春凡
涙るやら馬乃何さうぬ何さ
四句めハ身そ人の控何さびあるをさ
白の白馬驕オヤウくはむと子シのまを
をつけり
か白平たはまるるる原のそ

付
二

三

入月の為ウス他ヤ糞ハくるハ衣ハ老ハひハり
前句前句習習小小海海のの大大ききななるるととつつ小小僧僧替替のの詞詞
わてわてススるる原原をを習習ててままままままひひそそううよよ何何ゆゆゆ
くく小小僧僧ハハ手手跡跡ふふぬぬれれるるははままままくく小小僧僧めめハハそそれ
をを落落衣衣老老とと身身々々何何やや一一ききままががこのこの者者れ
ススるる原原けけがが入入月月ののふふららたたふふけけららままえ
ええぬぬどど何何ととりりたたふふめめくくよよくくままれれららや
一一からからぬぬ衣衣老老一一騎騎落落けけきき一一たるたるゆゆえ
何何とと人人ちちららむむととのの附附合合なりなり
川川小小瀬瀬出出ささ月月乃乃たたるるん

雲雲行行もも秋秋のの日日ととれればばむむざざ降降
おお白白月月ののくくろろくく晴晴くくるる衣衣るるれれど
秋秋のの白白ととれれたたちちののちちかりかりめめててかかききままり
夏夏ほほどどなくなくばばむむざざとと傳傳出出くくるる衣衣れれのの
天天衣衣ななまま衣衣小小海海ととくくべきべき附附合合のの衣衣際際
ななまま衣衣
衣衣乃乃たたととむむ無無乃乃細細衣衣
衣衣亦亦屋屋ハハ衣衣亦亦衣衣形形ををかかききららむむ
おお白白をを衣衣亦亦屋屋のの衣衣とと見見くくるる附附合合之之
狸狸衣衣たたどど衣衣乃乃降降衣衣乃乃のの衣衣乃乃

まいら戸ふさる言うる言乃月
四句めさへめくはびりきふと見くまら戸
ふさるのりひかめく人も任ぢなりける
吉屋敷乃はまおきごき言をけり有
一原うちたてくうめ一枚
まのぬいねもみらぢふ自由はよ
たのきき伴持たごふ下る時いらつまけ附句
を思ひ出しく涙もこがるたぐり吉人乃
志とけりくたふる取れ句をたきとるま
なれど道中のまぐり目筋

たあらんくうれし十の子
よ代経べきものをたまぐ子の
お白十の盆あらべたるは男のほもめ
何れで子の白け盆ならむと思ひあめが
つた人の子の白よ何れとやよとの
針みつけり一句もさへにきくはる句み
ていつめでたき句あり
な降叶まじるは本をつとく
四句めはは降すぢりのは本をつとく

家ぬゆるる夕ぐれのまぐさ五句めハ何
るのまぢなくたぢぢられと見くるのまぢ
向るわかくまらしくときまゑちまぢくたぢ
ここのやうに〜まぢもちうらあぢぢぢぢ
正凡のたぢ申とらあぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ちのみそ

お市お人のたうる夕月
本刀の音を〜まゑくる居合ぬま
伏見大津あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
絆をぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

上のたぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

第四句のたぢに〜ぢぢ〜五句めもやぢぢぢ
商人のぢぢのたぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
るぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
のぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ろつと〜ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

はるをけりてくろくつこのがけに海をま
に中とありてさむめもその物を新うた
ぎ奥の産みふめつて乃森不取つらあ
ざり人のり森てあそ者もあつて月をむ
うひくはのこめこつけるこ

この本は... (Faint bleed-through text from the reverse side)

混雑の記

混雑の記
記に巴波よみり於の...
記よ之河をふるよ紙衣

あよもい一るめくみかー栗の依階ハ解
がこさありあむ匠述の志と見く於
延子鳥帽子をぬぎく紙之を見る官
を辞したる人くしる附のあらむ
着ハ匠之が肝意を大集ふ

雷鳥のゆきるハは備成なるあらむ
おむ韓退之が潮州にありける時のふ

御金
三十一

あらむら後向に近きこといふよりいふこと
點踏をい送るの序みむるといふをた
てたるよりいふるの字一字の附とゆ

倭^ハ鯨^{セウ}撰^{セン}つゝ^ツ活^{カク}の^ノを^ヲ吹^フ

朝鮮^{テウ}西^シ儀^イを^ヲ贈^{オク}る^ヲ途^ツあらむ

附^ツまはらむ^ヲあらむ^ヲ解^{トク}き^ヲ後向^{キョウ}大^{ダイ}因^{イン}の

ち^チの^ノあらむ^ヲ

櫓^ロ入^ニきぬ^ル氣^キハ^ハ十^{シウ}の^ノ荊^{セイ}み^ミく

所^{シヨ}不^フ胡^コ産^{サン}く^ク世^セを^ヲ夷^イち^チり

お向の櫓^ロ入^ニきぬ^ル人^ヲを^ヲ男^ヲと^ト見^ミよ^クあま^ク水^ヲ

いひ^{イヒ}ん^ンが^ガ情^{ニョウ}合^{ガフ}を^ヲそ^ヲ男^ヲと^トな^リて^テい^ハれ

お向^{オウ}ま^マて^テい^ハ女^メを^ヲい^ハり^テお^ウら^シく^クつ^ツけ^ケる^ル人^ヲ

い^イま^マお^ウり^リて^テも^モ様^{サマ}け^ケら^ラば^バい^イま^マと^ト相^{アイ}生^{シヨウ}

か^カき^キぬ^ヌる^ルは^ハい^イま^マと^ト相^{アイ}生^{シヨウ}す^ス

山^{サン}野^ノい^イぬ^ヌる^ル餅^{ホウ}を^ヲむ^ムさ^サなる

盗^{トウ}と^ト井^イの^ノ月^{ツキ}い^イぬ^ヌる^ル伯^{ハク}夷^イが^ガ足^{ソク}洗^{セン}ふ

お向^{オウ}ま^マの^ノ足^{ソク}洗^{セン}ふ^ヲい^ハら^シで^テは^ハね^ネの^ノ人^ヲと^ト見^ミて

伯^{ハク}夷^イが^ガ首^{ウタテ}断^{タガヒ}り^テ死^シす^スに^ニ似^ニて^テ死^シす^ス

る^ルさ^サの^ノを^ヲ思^{オモ}ひ^ヒ君^{キミ}子^コハ^ハ溜^ルも^モ血^{ケツ}泉^{セン}の^ノ水^ヲ

飲^{イン}む^ムと^トい^ハふ^フ法^{ホウ}を^ヲい^ハく^ク飲^{イン}と^トい^ハふ^フ

御金
三十一

はる伯夷のめきば潔の人も足ははる
むと階替の伺之益泉を益井とかへる
も伏潜あらむ

嬰

の淋を母ふけまされ

つひふホッ人シヨちからぞぬり

お向ふくつみくもも出ざり
暎の淋をふさえむとあらば何なるを母
のさしとめたる舛之後向まぐふ甘みの
つけてももゑき人に志こがれぬを
はせうらちまどりりてちのうらむ

ふちあて世を思ひてふれむたを淋を
ひくるを母のさしぬるさしきぬくふと
けめはまもるもゆをぬめたるたを
はまくる一粟ちれおの向くふり

擗

体かぶるもあをの

すは海き水の衣乃み

二句階替ありあきも吉洞

月の神かろぎ子ム隠る縁の上

鳴の羽まづるおははる

海合

四十一

死しらぬ僧をいぢりふら 草落

月の句さめく 蕭條たるふと見く 町の
さふおあけさるりきをつけ 後句枯して 僧
とらなり ぬぐり 後の世乃こころをよむ ねん
ぬ 夏は海をさる 落のわらふと 子に 落
あふと 落に けり 水なるもの けり けり
もの あり けり けり けり けり けり

時 ぬ山崎 今年 何を

い 世井 のどてらを 登り 深なり
けり けり けり けり けり けり

お けり のよそ けり けり けり けり

一 の 娘 里の 庄屋 けり けり けり けり
お 句の 夏に けり けり けり けり けり
こころ けり けり けり けり けり けり
へる けり けり けり けり けり けり
お 夏に けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり

お 夏に けり けり けり けり けり けり

時 けり けり のヨク けり けり けり けり

お 句 けり けり の 顔 けり けり けり けり

後句ハまゝハちねあけのさなる池のさめ
浮世ハ沈む寔^{カム}々^{ジキ}の^ヤ儼
習ハ花を真^モ一^ハ笠ハ内む儼
附合ハいりあらむ句ハ笠ハま一^ゴ天^テの
雪といへる詩法をいりく依^レ借^リ一^ハたる
老^ニ進^ル一^ハの^ハ懐^ク一^ハく^ニま
奮^リい^るま^いり^いた^もら^らハ^ハど^や
お句^ハ其^ノ角^ガが^キま^るゆ^まて^ハお^のみ^まさ^まい^ひみ^まる
あり^ハ悔^ハ句^ハお^のり^がゆ^めを^いて^たり^ハは^ハま
角^ハふ^く一^ハた^るよ^く

聾^ハ入^ノの^ハ止^づく^まふ^ハぬ^きぬ^く
せ^しく^いや^むづ^く昔^らう^らく^たり
お句^ハま^きぬ^くに^ハ聾^ハ入^ノの^ハえ^をし^ちち^の用
ま^をま^るゆ^ま後^句ハ^キ徳^を塞^下の^曲で
つ^ける^ハ古^の詞^の趣^を
歌^ハ小^の黄^金ハ^ハ小^の味^をま^を海^を
黒^ハ細^く一^ハお^く一^ハめ^が能^く
昔^方が^おま^けけ^二句^をあ^らべ^たの^がい^うな
は^らつ^つ一^ハ何^やま^りあ^らむ^おが^つる^なり^ハお
句^ハ能^くや^ま一^ハま^るる^ハ白^の車^轉一^ハい^へる^は

後句ハまゝハちねあけのさなる池のさめ

句の巻乃中の句にてはるはちぢさよのたふ
 予むぐ暮うらみ奈こいつ。句の後句あり
 後の黒細の句ハ詩商人字を全負るは僕
 くのいつ。是句の脱れは句めまふち干
 此さ妻小罪をゆ。さうむ。いつ。句の後
 句よつ。も。り。回。巻。も。何。ら。ぢ。は。は
 黒細の句ハ亦四句の脱れ入るををいつた
 一。く。け。二。句。を。バ。あ。ら。べ。ら。む。い。つ。ま。ひ。が。こ。

樹原トリスの角を巻おむ

齊津サイツを使シとて荒海のアハ

お句ハ琉球國リウキョウコクの浦名ウラナは東トリスのさるのこ
 後句もその何より小磨法コマホウをわく者モノの何
 らむとの附句ツケ

疾ハヤの弓ユミえ 猛タカき世ヨ出デよ

虎コ懐イ子コ娘メる 何ナニら つツき

お句は猛タカき世ヨ疾ハヤの弓ユミも引ヒつツだダきキ英イ旗ハタ
 出デよヨ之後ノチ句コト虎コを懐イすスふフよヨをヲ見ミて
 吐ハきキハめて疾ハヤの弓ユミえをヲ生ナむムこコからの
 お後ノチぢヂおオ杉シわワくク何ナニもモくクげゲあり

山寒く四隣の床をふく見

づつと火ききえく指乃ともび

いづちあらむ解きより何とんぞ

西風を待よつてお何やなく

哀いふ空城のながく吹洞るらむ

お白の抱女あとのまがく後白のながく花の

ひまこと心あり世ふ秋の花とつて餅をながく

餅お森ともおちるよていつて

みちのく乃夷まらぬ石白

武士の遺れ丸森戸くららん

前白みちのく夷の石白をさへ見しらぬ

後白夷の無礼あるは昔城の大君は

いよりぬひし侍ぬらむ

庭のがけり火たてるも

宋女五玉のら練のうちあき

庭のがけり火乃氣さうまらうふみるは後を

らむといふを哀白くはけり火を清士のた

火く玉のら練ふ宋女めくたふみ玉ふ

風情はありたる附白く

ねろさぬ定に枝のぞくね

傘の陰にかくくうらかこぶけく

お白堂の戸ねろさぬとつよを傘をちりが
仕よりてあるふと見ゆる懐白く

衣をたつ鎌倉山の翼ほし

走ぬるたもと成白くふ凡葉

お白の衣きくと仲仏はちうひく鎌倉山の
ねくふりこもさたよ人もまきこえ又ハかまく
ら山の仲仏にちうひをきてたのこももめ
いづれねがやちあらむ短白いづれも思
ひ入りて走ぬるをもとふ又凡葉の白ひ

白ひまわりくわゆるく心を静らんまがごと

もみせつたの衣の懐るり

聲了つ方ふ鳥ゆる道

橘の葉よふふ葉成る後り

お白の聲了つわゆる鳥のゆるはる葉の地いり
ふも居士ぬぢけ人のほだきあけりこつめ
世も人も見えだりいれよふ葉成る後
るはよの附く橘の葉よかくハあふぬぢけを
ごあふぢあらの葉あふあふたぢぢ
よて松の葉よとつよも同ドりのありはまご

猶のまふし哥かくるもの何きバ
何らん

凡の音たつらぶ菴ツテツ乃いりく

大口ウチ若るる庭の雪拂

茶臼菴ツテツ洗の大なるがいつもぬらびて風

の音たいつりきままでの庭ハ平人の家

ハ何らぞとききて庭の雪拂ハ大口と

する大家の何れきぬをつけるものと

みりミをのなるから梅子のさ

襪ハキ花の縁ツバはたさおとく

いっあゝの附意ぬらむきとりがく古酒ハ
ほむぬかゝるをなま

世の中を画ふのふしをる茶の煙

妹がうら乃からめやたいた

お旬ハ画師ハ何らで画をぬとせりやまか

いらでかく一に茶飯煮つて画よふけりぬる屋

居たどのにまへ後旬ハ画よかける廿の終な

れからゆらゆらとくする附向ま

まねマらラきキくク室ムのノ松マ風

津の園ツはツあツいツくツとツおツりツめツて

前白の意人の何れの子守りくかきて金
小ひりり森ておーる此差のもれおまハ
一くく ^{キナ}お遊いらちらむとんきくはまのり
ほ白のまららよき句てたどおのりきを
つけねばわごりのおまのたなきの城ひ
たよのこなきど意白の次まつのくよれ程
波とやちくくひくくはくはくたるお無
ふよく筆おつくはむや
餅二かきぬえりそよ常
若るよのちよふ子の日おひらむ

前白いふお枕のおみ餅を用ゆるよ源氏
お酒ちのどま何の餅めく ^{オモカケ}何ま小かすれえ
よ一きりてるいりひたあべー後白の若る
の抱女乃いりひるよまめあした
いが庵の遊ふお宿りた何めよて
髪なたやまをみよふ身の色ど
冬の日お依階の家くのはま出くくわ
一りれどけつけ白を何よ人の後お遊ふお宿り
庵の人お髪ハやんく見るとはりりーかよん
をたよかくまふまがくちめといへるうら

キコエぬ卒に母ふまごくと泣
礼法の曉きく火を焚く

お白中しお卒に母のふ字乃きえゆきな
おもひも存うらめふ侍八目の茶は
御とくかありはたし一ありるべし後白
墓守の火を焚ぬるはまきえぬといへるふ
礼法のひびきぬとまきぬと

二の尼ふ近衛の花はけりきく
餘ハむらよとばりりぬれむ

前白二の尼とつふわりり一は思ひ

からけりし人の君もろくはさぬみみ
らも尼となり君乃お言提とふらひな
は人ろの尼はものごとりきく人の君は
裏へり或はむりハふづりへきし人の
里ふ下おるは後白もまぐらろの人よふ
おの藤の藤よまあるとかとちほさ
今も娘のふを放つて
盗人の記念の松乃吹をい
お白おひますけし娘おをはるつ
たごその系ををけけるあ

何れもさの選りもとけし時を

秋水一斗もてつてまねず

お向におまがら送くをどしと抱るを去

きあといむとて秋水一斗とつらうらうら

水時計のりあるべし冬の日は依階へ

まよふ古油の体真何とくかむつり他

りくるおん

中ふ木キム 撞ツクをたさむ既登折

牛の吹くあらしふまのゆふらひ

茶向はは人儒者あまのからめきたる

たのめ牛ウシ 太ヒ人の何げつらみ計ふは後計い

とよ

床ふけく語れはいとある男

裾はまたけのねと跡ま

前向きえたるま、あれどをうらむと

後向はけいこのためふむり 裾はあひ

らねるるのあざ思ひあう ねあまは

け二向たれましく 傾カ 誠マコト 賣ウ 女メ のりふと

めれどろれいそとあまらふところ何よげん

ふたこくはまはくし

海客

五十四

明日ハ敵千首おらめさあ

小二方ふ子重とらせひとつてひ

茶臼ハまことに戦場の白なれど後白を
陣中（陣中）のりふとつてあつたきだて公ねハ
附向ハ茶臼のりをかへて志らまよく附
抱多しけ向のころにたゞ恒まりの席と
碎まのたふし敵の首おらめさあ
おどろくるはまよつてやこたつてのり名ハもれ
化名をあげば軍出ふ何よべき名をささるる
様におし併きゆる室不のらるる

管 越え 桑の 燭とも 一とく

さしハかぶろいとのまぶがハかきつて
おぼろおしつれしハお女（お女）の室にアホ
るころの明らん 後白ハ精進のかの様
な一さばうち何ぐゆるおの室とく
飽一るやけきけまをつけたる
三味線からむ不破の糸人
道さからみ法でおら。其久をさる
凡ねの籠人あよだ

月ふたくる 痛の髪は赤枯

七 七

変さぬ 碓 降 嶽をまつ

と小八師軍更に 解いそす

そぬのまつつとよき 幸ほつちり

決より 硯をひらき 山陰子

山のたきまひ 破つつ 足のりきあそふ

見まごう ながさき 流 綴 ちるばるこらぬ石

千 纏うちかけ 詭 硯より 書いて 侍る 山陰

ちるばるむきごう

灯 籠 ありとろし 小 懐 くらぶる

そ海 秋のまきまのふ力を 拵 づるお

灯籠ありとつとつとよき 碓と 碓と 對一 なる

ありのなる お 撰 たりりり

まがき 近 津 江の 水子 ぬれ 行

佛 喰 たる 魚 ぬれ 死 けて

つるまの河とよ河と なる 大 魚の 佛をく

ひたりへ 河と まご 詭 き 懸 ろるり 何

くのあより 何くの 佛れ 河ぐらと なるお

たのなる 古 おぐらりの 佛を 何りや

子 碓 ちるばるの 由 田 ふる

山 げ 小 碓 ちるばるの 花 ちりり

春の目新

雪の粒^{カキ}乃^ゴ園のまめづり^リに
襟^{エリ}子^コ首^カ旗^チが片^ハ彼^カを^トとく

お向^ムの雪のた^タもきふ^フ国^{クニ}のま^マもる^ル風
騒^{ウツ}の人^{ヒト}我^ガ係^ケ乃^ノり^リく^ク似^ニ株^カ買^カのた^タり^リも^モ小
子^コたる^ル化^カあり

けーの一^{ヒト}まふ^マ名^ナを^コぶ^コを^得得

二日月乃^ニ来^キハ^ハくら^クく^ク持^チの^ト年^{ネン}

糸^{イト}合^アハ^ハき^キげ^ゲー^ーの^ノさ^サら^ラあ^アた^タち^チり^リや^ヤく^クを^見見^ミて
大^{ダイ}悟^ゴー^ーた^タる^ルま^マど^ドと^後向^{ムカ}ハ^ハ三^{サン}日^{ニチ}月^{ゲツ}の^出出^デる^ルさ

ハム^ハら^ラく^クて^持持^チの^こむ^ムと^呼呼^フ者^{モノ}ふ^ふよ^よみ^みく^く禪^{ゼン}人^{ジン}堅^{ケン}
固^コを^持持^チてる^ルこ

ま^マぐ^グれ^レ飛^ヒ竟^{ゼン}と^花花^{ハナ}の^かげ^ゲよ^よ入^入

る^ルの^ハま^マれ^レ日^ヒを^ホふ^フも^もれ^レあ^アど^ドく

花^{ハナ}に^こぐ^グれ^レく^く竟^{ゼン}花^{ハナ}ふ^ふ入^入を^西西^セ行^{コウ}く^くね^ネが
い^いく^くハ^ハ花^{ハナ}の^かげ^ゲよ^よて^ああ^ア死^シむ^ムそ^のき^きら^ラら^らぎ^ギ乃
空^{ソラ}月^{ツキ}の^光光^ヒとい^いふ^ふ奇^キを^思思^シひ^ひお^おく^く西^セ行^{コウ}ま^まその
空^{ソラ}の^のふ^ふ赤^{セキ}死^シむ^ムとい^いり^りれ^レく^くた^たの^のれ^レも^もれ^レる^ルど^ドく
る^ルの^のれ^レ死^シた^ター^ーとい^いる^ル係^ケの^何何^ニの^も西^セ行^{コウ}を
くら^クや^ヤした^タる^ル公^{コウ}卿^{ケイ}の^さら^ラり^リこ^こなり

控らぬくくゆるり 処々の放まきる
火にぬ火燵なた人を見む

赤白に響き鳥ふたごく人の声くらしる
をいひたる之火にぬ火燵にうもあま
トきものくくあまの侍もくつし
うべたけしきあらむふ赤白の
たるを死りしる人にしるすけ
冬まつ 納豆たぐあまべし

花子位 桜の撒とまてふる
赤白に秋を赤花をうけりてつ

たるものなり 白きへくならむ解が

西南小枝の花乃つむむ
茶の河がら小 茶本つまる

茶白枝の花よりあつて月をまをたるよ
の根幹からあまの茶の河がらの新
ものをつけく何つらひたると茶油茶膏
とて使ひしるあま

敵多 白系 茶の

宣の日乃 且を 煎治のく死
赤白に茶のまいつちるや又たぐま

たよるや後白の飛流が名海くこむこの
いのりふ宣のふく起くよ花よのこむを桑
はらまあり
深さるる曉アカサキ花ふかりこまを
結衣の下子 信ヨシと春風
茶匂をうのまなごく見くめいく曉の
深ふむらひぬるはまは軍の出立よに何ら
ぬどねごやちあらぬ世たふればかりよを物
具をたるうぐんぼえの下のま、うちよるひ
たるまごく

磯とほま重 葉切りゆ
秋の只旅乃ち連歌いとかりふ
砂とよと重の葉そりふ出のいろよもらま歌
の席なるべりねお匂のやうさ内のもねご
ろりなるよげまもも何らぎれ旅のさき歌い
かりふとあままりたるく古人の心を月ゆる室
たのよらな
夏涼き山ヤマ櫛タギふけくら見む
麻アサ加里しつふおの葉ハ阿む
お向うち何がりくるふとりておの葉ハ阿む

五十一
五十二

は家こつけけるあり麻りりハ何の化名な
 まで荒菊とも菘菊ともワビきを麻りり小
 夏をもちとなくむうーかゝる葉も何のびき
 やーの名をつらりくるまゝくぬく
 今菘葉ゆるら本爪の山阿い
 昔を覚えてるる小泪ぐとあう一り
 空雲の人をゆるーく本爪の山阿いを何のん
 体骨を見てりがむほどあうかくあらむと
 かなめもつとものよとキム原の人とるこ
 はつけ合ふや

けー尼の小坊まりふうちむきて
 をる蓮の葉あうく及まきの実

ゆさろるなし

豆腐つらりく母の喪ふ入

えの草乃袂も破ぬるー

此幼小喪ふともる人を汝等のえぬと見くる

附合をりえ取ハ母小若何りー人

ひとり書をみるる葉の戸は中

二丁ほご西ふきぬくはきくゆるり

ひとり出をよむる葉の戸ハ二三丁も村家を入

だてたるをー

櫛ヘシの風乃豆がらをふく

寒き知チ小住持ビヤガハひとり柿むきて

茶匂いもも荒さるの貧ヒツーげるよやま住

持の柿むきぬ。寒きヒツがぬがぬー

小僧あーりずかーまきりる。

能テ細ヒの陰エ去キ小あまのほをんこ

来ライ輒ラクの物祥人小画をかきくあまの名ほ

を飲さる破ヒふ僧あーりずかーとまきりる

玉山あどつふ大さるのたまと

赤夏アカナツはなみゆのをもてるい笑ひより

宮司が妻メ不フ一ヒト保ホれられてわぶ

前マエ白シロとい人をーたる附合ツケ之ノお白シロハみゆの

もちく笑ひー人奴見ゆく恋とーあり

後ノチ白シロハたのきみゆのもちて笑ひーをま司

が妻メ小思コオモハれたるとつよふかーと

入イ月ツキ平ヘイ鶺鴒セウリウの多オホれわーる穴

駕カ左サき園エン乃露ノロ負ツれゆ

いらちあらむまめがー

一ヒト輪リン笑エー芳ホト茶チの定テイ

暮名の工夫二日宵々。目を眩く

おもしなき附合之何ぐとよぶか恨どの暮名
うちの人と半うちけく勝負いつの白き
めむと契りちくまふかへり定のもとふまづ
うふ居てんに落ざりしを二日までユま
しやうく思ひつきまふ目をひらき
見れば定おの若茶一輪受出くる人
笠おめて衣のやぶき縋りぬ。

秋の鳥乃人しくひみゆく

け句や人を秋殺す鳥は山何ぐ一せなど

のかへるものとも思ひたらでとまのよふまき
しき破き衣成隠りぬ。しきものを見て附
た。之附ぐろい志づらくまて一句のやうき
秋こし字のゆくまりりた。ほぐま。くま
はたらしらゆへらざんがかる句をはく。いあ
り。

美人のかたちおむらげらふ

報夷の智耳を奉た様と身を倦く

玉照君が古るをふくみくの他と

京小名高し福の呪咀

海士の松をいさえ思く馬小舟あつたら

まこしきこえがらんれど強くいりお白ハ京

居て痛の哭祖ふぬをほくる人之後白う水

成増ぶくこの海士乃松をいさえ思くする

平ふゆく何や一げある男ハ京小舟さるき痛

の哭祖何ありといふくろあらむりぬ不た

やうあらぬ

棺ハツケ月海くち桂ハツケのひぎきハツるく

お白月も海くと西ふかろぶまぢまをまけ

ハツ射くつみものまごきけ一まをゆく見定めて
人の今死くる宿中たり

高コ野麻ノの懸カケ小島 つらりく

紅海の度タウシ葉ハ花のまを 徒ヒナり

何りのまのたの。附合ツケたのべ

酒飲む姨ハハのいふ淋シ一た

双スガ六ロクのうらみをみにつつく

酒好の姨ハハより舟のまゝるはまふつけりき

りふれ双スガといまけくるみぬくらぬ一まご

何りてあゆむらふとむらふ人もあし一君ハ

いづれなきぞそのづききえくるふは
と四ひやりたるはま

髪下衣侍従が娘をとりへく

聖の宮乃何らし一故王さむ陸

赤白ハ髪下一く嵯峨つくりふかくるはま

と長くかきしゆにゆえ何の聖のふはま

さをつけたるこ

藝者を留 執名月の冨

面白の抱女乃秋の萩さくらや

まの拙治 冨乃何らで風流のたれ人乃

まのづなるべし

川激ゆく^{モトヒ} 松を角小 借付く

舎利くる 滝小 乾日くつらふ

吉洞あしハ解一がきく 吉洞よま

洞あらしぬ何王のちの洞もま吉洞ありこの後

のりつづべし

洞激小 洒をかく執 様屋

ふのよきく 女子^{カヒコ} ねらりり

いづるよつけざるよや

アちれ一田のいろえ乃きさづり

三十一
三十二

三 船の 船 尾川乃 秋

秋のき涼川の秋をきらぬが船のしるしを
ゆき

花 出^{カスガ}あふる 叶^{カスガ}くさぐさの暮暮

いふ^モ百^モ香^モを^モ次^モ矢^モを^モ負^モあがら

田野之秋色

月^{カスガ}のく^{カスガ}赤^{カスガ}板^{カスガ}山^{カスガ}を^{カスガ}る^{カスガ}づ^{カスガ}つ^{カスガ}ら^{カスガ}む

雨^{カスガ}之^{カスガ}秋^{カスガ}の^{カスガ}法^{カスガ}理^{カスガ}む^{カスガ}あり

大^{カスガ}盗^{カスガ}人^{カスガ}の^{カスガ}入^{カスガ}り^{カスガ}一^{カスガ}次^{カスガ}なる^{カスガ}一^{カスガ}何^{カスガ}が^{カスガ}一^{カスガ}盗^{カスガ}人^{カスガ}
の^{カスガ}黨^{カスガ}を^{カスガ}む^{カスガ}ま^{カスガ}び^{カスガ}く^{カスガ}何^{カスガ}が^{カスガ}一^{カスガ}た^{カスガ}司^{カスガ}が^{カスガ}家^{カスガ}子^{カスガ}入^{カスガ}り

何^{カスガ}く^{カスガ}山^{カスガ}を^{カスガ}去^{カスガ}る^{カスガ}く^{カスガ}あ^{カスガ}ぞ^{カスガ}む^{カスガ}の^{カスガ}一^{カスガ}ま^{カスガ}の^{カスガ}か^{カスガ}り^{カスガ}よ^{カスガ}ま^{カスガ}
よ^{カスガ}く^{カスガ}何^{カスガ}の^{カスガ}よ^{カスガ}り^{カスガ}あ^{カスガ}り

ひと^{カスガ}の^{カスガ}兔^{カスガ}の^{カスガ}爪^{カスガ}く^{カスガ}ら^{カスガ}よ^{カスガ}ま^{カスガ}る

立^{カスガ}み^{カスガ}あ^{カスガ}る^{カスガ}人^{カスガ}の^{カスガ}汗^{カスガ}よ^{カスガ}と^{カスガ}ぢ^{カスガ}ら^{カスガ}ひ^{カスガ}く

た^{カスガ}り^{カスガ}く^{カスガ}立^{カスガ}る^{カスガ}あ^{カスガ}る^{カスガ}人^{カスガ}の^{カスガ}汗^{カスガ}よ^{カスガ}か^{カスガ}ら^{カスガ}ひ^{カスガ}く^{カスガ}
人^{カスガ}の^{カスガ}汗^{カスガ}よ^{カスガ}を^{カスガ}い^{カスガ}つ^{カスガ}り^{カスガ}か^{カスガ}き^{カスガ}ば^{カスガ}兔^{カスガ}の^{カスガ}爪^{カスガ}く^{カスガ}ら^{カスガ}よ^{カスガ}
ま^{カスガ}る

凡^{カスガ}く^{カスガ}ら^{カスガ}き^{カスガ}大^{カスガ}ま^{カスガ}の^{カスガ}秋^{カスガ}は^{カスガ}七^{カスガ}つ^{カスガ}や

山^{カスガ}門^{カスガ}を^{カスガ}あ^{カスガ}く^{カスガ}生^{カスガ}理^{カスガ}の^{カスガ}美^{カスガ}矣

茶^{カスガ}白^{カスガ}大^{カスガ}の^{カスガ}秋^{カスガ}後^{カスガ}白^{カスガ}ハ^{カスガ}え^{カスガ}日^{カスガ}の^{カスガ}秋^{カスガ}附^{カスガ}之^{カスガ}ハ^{カスガ}何

里のまゝ之

宿の七ミヤダ燈小拵子をほる。

とち原ふたのま歌半付く

拵子を堀く宿のみやげふまゝくをま歌

師と見まゝく。附句之

うばおの髪まゝ。女もなに来て

えをを見まゝ。朝ぐふの月

うば玉ハ秋とつよの枕とまゝく思ま

ら子たのぞも用ゆる通思の舟にたうちぬ

のかまきとてーもくば玉乃わが思髪な

でぞや何りルむといるを思ひく髪ハもとより

思まものあれづく玉の髪と依階ふ利みこ

はえはくく附ぐろハふくちぎりら。女の髪

ふまりてりまハかく思ひまゝく。比よあを

たり浮世ハたゞまあぶろーの中あれハよ

にをうたの思まを思ひむかゝ。まゝま

ーさかゝ。思入むすりハのちの世れ

ころたろろ。凡れ更にハ思ひたえぬ

のこゝいハむまゝ。まゆり。なごゆのまては

と一念イキヨムみホツ世キ想キーたちまぢ念を見まゝ。つり

附句

三十五

はまぢりねがねとつよしくほりぐこのまを
そくしたるこ

陰不き於^オ朗^ゴのかづらりゆ道

ひ五指くちあふ立る 瘦 男

浦をの御^{カム}置のりたあふべ

うちがづくお糸のまをちあつぐ

たのましく天と 証 冥ふゆく

はまに公羽のこもふ名高き忠の向之まことふ
忠の情をつくせりつづべしお向ハゆき
ものにはまぢりねをたぢなつみといへるあま

より何の川^{カハ}持^ドてみ下^サいやうらぬ人のた
はぶれまいやきものよぬひしたる内ま
あしき忠のまことをのべたるえもいハあめ
でた

入日の何と乃星あつらつ

宮やが波^{ナミ}持^ツも 花^{ハナ}の 冥^{ミヤ}

星ふとつとつ花のよるどよみえろあたるを
社家のゆめと見しくふおまがた灯の健^{タカ}ね
つぎよゆくさぐさをつけたる画も及び

スキ
層^{スミ}を^キた^キく くらみふたはる

射^ヤ 二

羽比ね巴負く麻すよ入篠の際

蔭を切て管にふくえき人の船すりねた

負おく山うげの心條の使ふ只ひとりかきあら

して麻の着をまら内ま何くあでえきくる人

あかりら

侘たもしろく 櫛の鬻者たる

更級の里乃きぬこをおふゆき

られもたなドえき人の櫛れかゆ老る櫛お

あらばけりーあのかおふゆくもろべ

二露を相おほく 濁る馬の血

坊まど者老ともいひで 追えよ

土の餅つく 舟よりねろろー

三句とも片むりゆのころあーや

生心條に焼つく 煙るとりあり

日くれて 赤る 松が 切け

山家のやうきこるがぬー

ま白赤煙なた級をつき向く

泪を顔をよごれ 目 さま

前白病者の療治のためな境ぐらちと

見えく 目病成つけるをぬ

香根小念仏をやしよ居士石
小株ハ縮の中ふつくさ

小株下の片まこ

杖でくつ産路が破とよなり
いづるふびむや嬢嬢の月

七時ふいづりを對しける附句とれも又二株

な花よ埴根取寄つ 草宿

かげらふまき 紐の下ぬ

身のうさも才子の足後よ春とちて

かげらふの句ハおの埴ふのちの句附ドてお真

しく書き人のさしど一葉もちての田かみ
才子のたまけよゆみてからそ世をのりさ
まなま

和泉のかづら 桶の名をとり

埴埴のふるき 朝ハ破まらり

とほほ意

土質もよむらり 柱ハ黒石

平家の忍びくわき 秋の風

黒石の埴ふをべー

埴なまの宵の月ふひらめく

附句 二

そつより西の吐乃松回し

髪をさる者の人くねしならびたる中

小西国北のどをよくきりたる人乃ものかざり

まゝに髪をさる人の下をろり何れも松回さる

はまを

瀬小玉子ハ何とくあらむ

山系花の傍ハ水仙 梅 棗

二句ともはさるるハなるれどたゞひならん

たゞ之附合の中ハ必かる句何るべし上を

ハよくやりの句をさるるハあつたべし

雪小鞍たぐは貫が馬

やどり七む大江の岸ハ八るや

雪に隣むハ貫がるハ大江の岸ハやどり

むといふ附句ハやどりもたゞやどり

割るらつて 状ハおの蓋

清 漆 板も先 押りぬし雲ハ沙汰

おきろきつけ句之度くの状ハゆき

は人と見うゝハ漆板のお後とさめさる

の清漆板をまゝしやふつらばをり

まじき奴ら漆板も金ふつまりくものりぬ

いよハ階梯の秋趣あり

直松が、ま^{アヒ}り 外も 虚つく

花ごも^{アヒ}り 物も 物を思ふらむ

二句 哀よていづれもを^{アヒ}り 悲なり 句意ハ

きこえくるものなり

森の 柵^{アヒ}り 女鳥をたがふ

女鳥の居る花は 結屋^{アヒ}らふものなり

け句のゆつま^{アヒ}びらやうふ二十と集よるん

口をこづ

歌よも 来^{アヒ}はむら 松の^{アヒ}年

有明の 梨打を^{アヒ}ばし 遠く^{アヒ}り

け句も公ねの 名高き^{アヒ}附句之 前句の 柏子よ^{アヒ}く

のりくえもい^{アヒ}ぢめでたし 句の 柏子と^{アヒ}よ^{アヒ}く

を^{アヒ}る^{アヒ}し 句意ハ^{アヒ}るの 子^{アヒ}を^{アヒ}な^{アヒ}し

殿さ^{アヒ}が 祢^{アヒ}む^{アヒ}ご^{アヒ}り^{アヒ}つる 松^{アヒ}ぼ^{アヒ}ら^{アヒ}け

えげ^{アヒ}くる 眉を^{アヒ}かく^{アヒ}き^{アヒ}ぬ^{アヒ}ぐ

け^{アヒ}し^{アヒ}もの^{アヒ}が^{アヒ}り^{アヒ}よ^{アヒ}り^{アヒ}る^{アヒ}べき^{アヒ}け^{アヒ}く

除^{アヒ}の^{アヒ}や^{アヒ}ま^{アヒ}ふ^{アヒ}思^{アヒ}ひ^{アヒ}う^{アヒ}ち^{アヒ}よ^{アヒ}し

は^{アヒ}る^{アヒ}ひ^{アヒ}の^{アヒ}持^{アヒ}ハ^{アヒ}階^{アヒ}の^{アヒ}中^{アヒ}

は^{アヒ}勃^{アヒ}る^{アヒ}よ^{アヒ}し^{アヒ}の^{アヒ}む^{アヒ}ち^{アヒ}き^{アヒ}り^{アヒ}くる^{アヒ}ま^{アヒ}は^{アヒ}り^{アヒ}び^{アヒ}く

思ひ予一たるはまな里けしど待りぬりて
やりく待のなるは子まめたるこいつとる
の相合あり一白ハ待を待て居たるが待り
ひ何れく待ハるもの中ハ踏たれと子や
ゆきとゆれどはよハ何らむたむ待のよのこ
とをやち一くいひのべたこと

京ハ汲さるる 碓井の水

五 川やねのくくこいつの不見えく
凡ほのえき人との水がこの水あをまて
水をたのむ人之片きば玉川のこいつまで

ゆみしなるべし

餅つくる猫の廣葉をお合を

執見一ハ笑るし 秋乃とるハ

茶臼猫の茶乃餅つくるをあきおし
見くいつしえハ笑る人の何れあるは
をつけたり秋のんハ秋の字あれば
たろろをつくきり

姉待牛の一連よりの教

伯何ハぬ越の宿キヨを織うぬく

姉のほきさを待兼るをふのやうさやち

扱ふむくひちあぐらお思ひぬ。はまこ
誼のこみまて廿まの並びぬて

卯月乃雪を握ニキるつくづぬ

前句田植のほきりある。み雪を握るとま
るをいひしらひたると

思ひぬ 幸ニキをこころニキ 傀儡

途ニキ申ニキふたくる車ニキのいニキをニキ持ニキて

おきしるき附合之車の中ふぬ。人お思ひ
の何る人あるが傀儡のこころニキまニキ年ニキをニキまニキして
ちしやわがまの上をこころニキまニキ何ニキらぬニキとニキお

乃まゝくたづし車ニキのいニキをニキ持ニキるとまニキまニキ附
たりお思ひふ人の幸ニキ持ニキてうニキくかニキのニキこニキろニキ
志らむ

老の身は襦ニキをふほどふほるゆり

君 流ニキりニキきニキ 海ニキのニキ糸ニキよニキ

前句老の身はほるゆりゆへハ老をぐら襦ニキをふ
ほどふたをへこころニキまニキらニキむニキお思ひふ人
と見し極老の糸ニキよニキとニキなニキふニキ世ニキの中ニキこ
だれて君さし流ニキりニキぬニキひニキしニキのニキ糸ニキよニキとニキふ
ろく襦ニキをふほどふほるゆりこころニキまニキらニキむニキをニキまニキ

らーちよ之

木の葉もちの榎の末も 神無月

つゝけりぬる 嶋乃くひもか

前白本がらりー吹立榎の木の花もたらしと

ちよ木のまごきりーきを死ふと見えくひ

ものまごーた流人の何り流るるをひ

たると

い葉をくむとく 藤ぬりーま

火ありーてゆるをのこハ何共ぞ

茶臼川づこのちひさき小屋おあくるまで

藤もやらぐりつーまのい葉とみおるふ子炬をど

ありーつゆをのこハ何共ぞくがめくるけ

たおあける河めさほ之山どえの炬、燈ひ

らひの炬あある燈ー

はまぐくのまれくをりル里月の歌

人一代乃、恋奴とよ秋

さほぐのかをりつゆすり次、恋の句と

あーく月のおふたのくはむげものがあ

してたぐひよをさなた時すりの夜をつ

まぎでものがぐるはまこ古お徳もかゝる侍

御合 上 五十三

何事かきしるき附合ありらま

下戸をにくめる雪の歌乃亭

早咲の梅歌ふたと一ため

兼白雪の歌乃亭に待たせつくり証すめ

きるが中ふたりく下戸なるをのこをそめ

たり少や片ま次の句をいけく回心の梅

を赤身ふたと一たのれとおのれ歌はる詩人

酒徒の懐をいり

明安き歌たまさくらが後立く

あふよを啼ゆくほくきささから

あまのこをうきまつけぐるの兼白其の歌乃

明安き歌ぬめよりほくきまをやく海

くほまげよりの情態之あうぬをくらき

うぬをかつ風流才一のほくきん歌かく

らりし風流公卿ふらざりし誰そや

舟よをむけ名月をたぐよやハ

おるおるのこつぎ歌海をみさ

兼句は名月をたぐよやハまぐさべた何

小舟よをきくあのごつあさま後句ハまぐさ

の舟よをきく使の若る妻もちてみ歌こえり

巻之三十一

さぐさともよりかゝるる家なるれどそ
はのみつぎばりハゆるさてあらむとをう
いひたよ

稲妻の光く来きバ筆投く

聖中のりくれ片神をまぐ

赤白ハ増居るどしておろきぬ。ふハ稲妻の
光り来るふゆるき筆をも投きくたす
がこなるれど後白ハおろす中ハ増居るど
りくれ片神をまぐとをいひたよのせしむ
おろすかへたるよ

ゆふを干 かるを借る 旅人

命ぞとくふのまき舟 懐

附ぞろハ旅のまき舟師の追たりしりの
くふ下りくゆをあるまき舟一と著て旅
ゆふを干りたる之れハ旅のまき舟を
懐けしとまき舟一と著て旅のまき舟
はちまよ

汐ハ干く 砂ふみく 浪ノ浦

日毎ハかたよ。家をそほひく

浪ナといふより原氏お徳浪ノのまよか

浪ノ浦 浪ノ浦

の頂上ハむのころ人老きみりれ今ハ里は
あふいとくろがそくくたむに何をもたふ
あくめよれはハあくとも在ふのきぐハかる
ものなり

と念ふ事とは楢の本乃中

聖ヒツリして聖アタシなむぐら此月もこつ

楢の本乃中ハまゝと念ふハひろふを念
固の人ならむとかくつたる之西行の撰集
抄などの藝もほゞ一次の句禪念のや
ふいひうけり聖法何とありくを教乃

中の月をもつと何とあり禪念禪徳もま
こゆるやうに何やありたる之世の依指を注
するものかゝるのをも何くの禪徳何の
禪念などはあまふ解まざる依指いらぬ
ものもあつたりも一は句もせよまことふ
禪念禪徳とをばるハ禪念禪徳よとを何
礼依指ハ何れぞあふよかざらざあふ
あふをふくめよ句やも底ぐるもたがる
けく併のこゆるよとをさうをりハハらちつ
けよそのさるのをいひつてたらむハとか

くたぬるべしかゝるものか時を抄らつても
の、從論ふらむべし

目赤のりたそのま、待小伝り

ハッふなる子乃顔、待げたま

まぐくはけつけ向まても何き目赤のりきを

たちまち待よ伝る才子のつげと見てワタシ

たのぶのり伝るふふめれどろのりハ、
とまきゆるや、たつりたるものなりたと

はつけ向目赤のりきををろのま、待ふつる人

を大人よりハをり、から才子の小見と見

たのふめ之心をつくべし

小畑内びーた、葉山子、伝らむ

るの戸は馬を、酒、僕ふたさへられ

をのり、き附向みくころ、何き、茶向のち

そ、凡、粒のま、く、と見く、か、ぎ、り、み、き、コウイム

秘、函、の、人、を、つ、け、り、日、く、数、升、の、酒、を、飲

ころ、は、價、銀、何、が、た、よ、り、あ、ら、だ、つ、ひ、よ、を

の、ち、の、よ、馬、を、た、さ、へ、ら、り、し、る、之、世、を、酒、壺、の

間、よ、か、く、く、秘、ぢ、け、人、を、い、べ、し

一、伝、か、み、や、茶、居、虫、の、な、よ、あ、り、る、む

海

三十一

代小出く 海苔 さくらふら
 米向世の中乃 俗物をきけくろろーりる。
 ものだうりかえんふらり何ふれまをまをん
 世の友とつひたる之 夢は虫の家とて七ひ
 ちきふふたへたるるり何りかぬくハるのん
 をもふくあり 後向ハ水色ふ水色をうり
 たぐその以時ふを何はきくるのくふふき
 んちりし
 糸白の音 中ちがらふふびき
 月をほくく。 螺ホラガイの 証

糸白の音乃 大なる音をうてもなるり
 む高軒かきく 略り居る人ハ高砂の徒
 の碎スズクと見えく 螺貝よて 歌やしたる大
 おまをつけくる之志あり 糸白ふらびきと何
 きバ自の向よて 碎ぐろふらくつらくと 糸白
 の音をきくぬく
 辛ニ螺ニがらの 健流る 音 次
 角の眉ふ 化粧 さくる 表
 法少納えの 松よ奥のふきき命ぐきも乃
 老のけつひといひ たびひらつけぐろはど

海苔
 二

三
 二

りたふらぎで

歩ウツ 采の出敷 川に

探ウツ 干小カミ 頤オボイ ちをりぶ 夕タ 暮キ をみ

昔の白の垣カキ みをきくふつけく 水橋スイハシ の探ウツ 干小

頤オボイ うちちちるく川口の出入船フネ をちちるめぬ

けしき

初月ハツキ 小外コソト 里の娘乃メ けしき

薄ウツ ハまねく 荊トゲ 被カ ひく

娘のけしきひきくをふの及く思オモ ひやるを

薄ウツ ハまねく 荊トゲ 被カ ひく 娘のけしき

なるべしをりしき 借カ 替カ のつけ白く

わたり舟フネ ねも明ア 方カタ 小山コヤマ へえく

待マ いくところ 西ニシ 東ヒガシ

肥ウツ 前マエ の山河

涙ナミダ をるえく 鄙シノ の橋ハシ 折ヲ

髪カミ けづる 態カタ の使ツカ 乃ナ 名ナ 者モノ つら

茶チヤ 白ハク 涙ナミダ ながらふ 櫻オウゴン 折ヲ 一首イツ よみたる 鄙シノ 人の

情ナリ 乃ナ せつあるに 後ノチ 白ハク 小舟コフネ のと 白ハク 花ハナ やる

まとして 髪カミ の油アブ 乃ナ 名ナ を 態カタ のとつふもつら

しとくかく 櫻オウゴン 折ヲ 小舟コフネ たるは まるくける

なり

くさきまをふてたぐちも樹こぬ

父乃軍 成 起ふ 一のる

くさきまのたぐちもむなしくさるるさきよりの父
ハ軍小出あつぐられのがゆハ病ふさく父よも
まぐさふうりあらむくちをさき月日なつは
わくく起くもあさくも父の軍をつるさる
孝子の情をつけさる

三度ほ たれ 勅のちま

山さぐ車ふけづる本をさへひ

かれふ沼阿こへとみことのりぬさかからけ
を三度まぐほさるふいりのくさなご
思ひよせて山さふたまりりさごとつけさ
度うれく月ハむりしの親あがら
老む子むが衣うつさる

前向ハま摘花の巻乃ねもりげをさふくめ
の後向も其ゆえ

道のをこれ松小一喝 志め 玉

長者の 塵 水音をあげとむ
お白ハたぐまき 祥僧と見く 長者をもの

の教ともせむ。奥ふ習を授こたる。粗怪
此をぐくをつけり

廿ツバ短冊つけく 於やり

急 蓋を 脊負 けぐ 辰

つばくらふ短冊つけく 放ち急ふ蓋を返

ハも何ぐ 大主をどのふもの 捉びたるべ

此れも依の對附なり

翌 強たるりふ 定ふふらばや

お 揚ふ及ましく 粟の急を定ま

附てろハと割をもらひく 隔る及ふ翌のぬ

乃きゆる 定ふうちより たる ぬるるに

大りの 粟の名を 忘れたる 之前 句 優ユウ豊トウ

なる ぬふ 次を やり つけり

酒ふ ぬふ 何の 友を つけり

ぬ けゆる 又の 一歯 乃かちりく

はつ け 句 箱ふ ねる ぎ 換あり 若 句 八 ね じ

ろく 酒の ところ 人 なる を け 替ドて ぬ

齒の ぬ け ゆる がかちり つけり ぬ ぬ

これ ぬ 理 ちら ぬ 又の 手 賀 或ハ ぬ

た ち ぬ ぬ ぬ 又の よハ ぬ の かく ぬ

附一

八

はをいあめる孝子の懐之かく茶臼ふつふ
れを引と取りつけるは名人のま段あり
まのれども如論茶臼の挽採時のまのり
たふまゝごぶを

山さるハ登も 狐のはま替も
花とひ束やと酒つらぬら

登も狐のほらあるまのやど山ふらさ
見く花ふ人のとへく酒つらぬら
つまつけ合之茶臼のころまで山さるハ
のちひはさきとぬも後白

借し大地の山さるハなるは

白さおぼの垣を飛とさ

借たりを標の枝ふゆ

茶臼春日のねるなるにひらく

垣を飛とさけまをそら鳥あぐ見くよき

日和成見何はせて借りりえ海らひあ

女のまらげをつける

相なた記念の報さるま出さ

何も焚火ふ皆つら

茶臼ハ天報といつる倫もの侍く後白ハ人

のちくけりるはのけりあまらまらけり
はあり

浪揺ゆー 美の敷陰

本^{ツキ}急のたかが 碓や留ぬらむ

たぐその堀ふれ附合之本急の草を碓
— みるあ小階替

方けりの侍中みにくまんで

磯^ツこぐー たる小樓もけき

ぬ人め子の情をつくー たり平生の敷とく
おひひけでなどー 侍中みにくまんで

のたまく小樓樓こぐー たるをさみけり
ふいひたるー たるがけー

船追のけー 船の喰飽

音やー 八何らぶー 神乃まらう

とまよー けりー まりあた其叔のけりたせ
世にー けりー けり

おおとさ白田もつたの本陰よて

つらもそつお小霧の卯わる

春うそ目茶とらバオ二葉よ前へー

おえたー けりー 長持の上

御書
御書

ともーびの糸めづらーたきのえ侍

も持のよふ頼忠たみもしく藤もをぬやう

さをそのえ侍と思ひよのうとるえ

いやーの束も走つべき侍雲

強比呂巴をかえうー出るよお

古者のがくりもほるべきねもろがを思ひよ

せしく強比呂巴をかえしくよおより出る人

何ぐーの君乃いろそのくちのうー

陰ふしー下るんおねぬの坂

宗長の真実寸白も筆の係

附えきとるるやうよて一海ねぐやうならす

綴強き袴小秋をうちねと

貞實の白髪をルは見付たり

前句禱の綴乃強さをくらめるとつよを杖

の字ふ心をめしく衣の身ふるぐハむむつ

しくねがゆハ人の老るるたまりとつあふりて

えドめしく貞實の白髪を足付て老を捨て

よーをつけり

わが顔ふせぬうーりたるおまの花

綴ふお篠とつアーさうづき

か木の花のちよとふ極まりなき。人あらば故様と
いへる盃ならむつけ白のひびきぬとよふ登しこ
るよハ依の化名あらばいりももなづくべき故
故様といふよて新小花のちりかふるりた
しよがめー 美ふふうく味ふべた附白と
サ舞車あふきくはハさるるともあらん

粟 稗を日毎の ^{トキ} ぬふ 喰ん 飽く
みよとつふ一字やて僧とさるせりもより
も捨身の行なれんぐうなる。里いりなる。ふよも
つるべんれどさまてぐよ肉 ^{ニク} 身 ^ミ なるがくくる

里ふくろとろとまらげ 毎日の粟稗ふくむ
果 ^ミ け ^ケ まい ^マ とをう

け 秋 ^{アキ} も 門 ^{カド} の 板 ^{イタ} 橋 ^{ハシ} 岩 ^{イワ} 氷 ^ヒ けり
赦 ^{シヤク} 免 ^{マム} ふ も け ^ケ ひ ^ヒ と ^ト り ^リ くる 月 ^{ツキ}

赤白氷凍く小家の柱も岩も 株木も枝も
門の板橋も岩るとつふあさま さいふを配ふ
と見て赦免ふも一人とりのとちま一
人をつける之 ^{シユム} 儀 ^{クム} 實 ^{クム} が 侍 ^シ も ^シ 何 ^ニ ぞ

もとの廊 ^{ナリ} ハ 細 ^{ホソ} 千 ^チ 篠 ^{チノ} 籠 ^{カゴ} 入 ^イ る
上 ^ウ 空 ^{カラ} 乃 ^ノ 春 ^{ハル} も 一 ^{ヒト} か ^カ 小 ^コ 何 ^ニ ら ^ラ ね ^ネ ま ^マ り

傳合 上 八十六

お白むのハ抱女町ま〜〜
ふも今ハ名の〜〜
お撫り星うつる内まを見く
たまり〜とつける之廊に
びささあり

まの雪お先何〜とや
麻巻あがらふ化粧つ〜
前白ハか〜いあ〜
たておの雪の物あ〜
何〜らむ〜く〜

の席を懐白依の川村〜
抱女乃抱屋と〜
踏牛の売を踏つ〜
身ハ蝶此何な〜
あらら〜
いひのべたり
とま小端手
ぬたつ
出 澄泉
ら小も

ちりり

何れの時ハ解よもるの入ぬらむ

樟の小枝小葉をへたらく

是向うき葉小思ひ一づみく解よもるの
入はむりある之後向ハ解といふ小樟をつ
けく葉をへつうひたると

霜降山や 冬はなともうけ

何れハ軍をいさるつ外よ来て

山よおのりしる何れはまふはな面の
ささくちりといふささはむげたると

をろのまいつけく軍のちをいさまで

ゆきくつれこのほまりきる

冬引雪車ひとめの夜有て

たのく、武士れ冬ごもる宿

前向ハ小越の大雪山あるべし後向ハ小園の
城を攻むと大軍たろひまら冬もかの大
小馬の蹄跡まべも何らむむなしく武士
れ冬ごもりおてまをまつさぐこや

宮小る水くき冬死り

冬松千両き松をたし入る

附合

十八

お向たるけなくさのいほ跡をゆるら
まぬらさし女あり後向いそのまゝその
めくりりたのき契のほむ何りい
住かへ子宿の柱乃月を見よ
は何りらむい条が終は
いふも解が
を山つごとのまふしご
淋しきや洞ちもきく来まふ
附向もつけえもきえさるまゝ之を
ありつに洞入る人もなくを山つごとの

つちのよー

花をたふす抱けをみちびきて
陋の迷ひ乃けむる春風
前向い馬ふまゝく抱け人を送るはま
後向い陋の迷ひのけむるたぞ碎のけむる
いと抱けをみちびくとつあ小迷ひのさむる
とひりきたるさるをつくべ
馬市くくく狗むりへさむ
懐ける父が引糸をとりつへ
附ごる馬市不出るほどのものくら糸をつ

附ごる馬市

糸をつ

久しく出る男がていつの代より後めらる
ら心算をも持つて一たる古き家あらむ
雪降ぬ松の木のふとゆり
社 踏 志ける 狹 乃 妻
前白河のまの後の山もゆき山と見てい
のしと思ひよりたけり林不むとつよ
妻と逢て志ゆるをさるる之にたるる
ものをかくやけしつらめたる名人の
あり

洗ハむとさあろろどなめ
あつたの令ハ衣をいさをぬ
いったるの俯ぐるよや
牡丹の毛下 風不のりあり
老僧のいで小盃とどめむと
お白圓の牡丹乃夕言をふくめるふら
るよき風はろよよく吹けさいうよも
の庭と見ろく牡丹見の極まりを
秋更く枝子小か内む若の
ひままきよみ波の谷

持子の何ごころもななくく喉に可くひす
ゆきも何れあるはまたそのづらつげら
ならむ

此株のさるふ見ゆる 篝火

車執供水の者も 疎

此株のする小見ゆる毎に供水の者をとる

からむもの附えふやの

牛の子ふあゝるたぐさむ夕暮ぐん

る雲まじりふとこるの 嘘

さくえがうしまひくさむとまらばたうらく

いひがきくせむ

松むさをびたしく 玉の境目

永楽の古きす 頰をいたきて

永楽の代よりお朱取たまりめく寺頰

ハ載のさなるべし 附えいさくえたるま

たのめ

捲上るは 兎の遠入く

わづらふ人平 昔る 秋風

二白のユ合渡者 落ぬべし 戸を捲上げ

兎乃遠入にうちあはその母をどのや

たゞに秋風をいひたるはるる
^子 豊 繁いと名む山陰乃塔
^エ 保 多村に浮世の印は春あて
 保ささるるをいひたるをこれ春さそ
 星みふる繁なるかたの
 葉下 花女の名をいひむ月
 花白の星みふるわき人ふかきくらげ繁なる
 繁のかたをまじくみふるさへ後白ハシタみふれ
 なく舟のり或ハ古人の舟をまていふ
 のちれハ葉ふ出くる花女の舟は出たて

かついやーき花女もて老舟をよめハ葉ふも
 入りくるをいひむるよとくくわい たるま
 ちのべー
 葉ふふ出く家路忘る
 福ふく咲本信をいひのわげらふ
 けのりや
 雪みふる沙をの市は名跡とて
 傳いその日をいひるるの
 傳いその日ハゆみ居てもはるる
 葉ふくはるるの依階の連年をい

つゆきのなるべし 俯さるるのゆらり

やまめ鳥乃 迷ふ 晩鐘

平つゝ 聖も 越後さ 花の峰

俯意ハ長旅のゆもたれて 聖に又つづの

つゝとこの山峰をこえむと思ひのやぶと

うたのちろーくやまめ鳥の響をきいて

まづがめも子をたきまよたる川てまを

あよねもむくよ〜〜ろがろき旅のゆか

ぐれちのらむくれど花の影あれはあは

むう〜まね〜のつみ〜

教くふ ねの 不乃 指つ〜

後 牛〜つれ 余り〜の 顔

これも 何の 宿の 附合 之 前 向い かなり なる

ねご〜 指つ〜 なる なる を けり〜

ハ 後ろ つけ ね 志り なる つけ なる 向よ

教く の ね を けり〜 けり〜 けり〜

けり〜 けり〜 なる なる なる なる

籾の 羽を〜 む 幡 幡 の 教

春 海 けり なる 見 が 後 め〜

前白やあしく何れなるふと見く見のぬ
スるも青とつげたり 舞踊の糸小兒をすえ
く ^{カニ} 刺かいつらま反情いふありぬ
らむおくらまぬちへ降く志めやなるふ
見のこりに侍りぬまづく位ざらむかぬて
ハ舞踊の糸小兒の糸をむを見のぬなる
はゆたへたる之
御前ハそのおたままで切せづめ
松うさねくは 衣 徳のち産
何れのまゝなる 附合ならむ

ちまこのけふいのるかぬて
御供くぬあまき 赤も 思がらむ
お白いそくえくぬまゝくつげらるハ ^{コレニツ} 怪
あどの侍ならむ 君の思びゆきぬあふに
まゝひて君の志乃くらや海 ちふあまき
糸くまでもたづく志のけくこそま
へたどたりぬれつひたるさまと
おづとの ^{ガイタイ} 妻帯 するの 侍乃奉
りふも命と 侍乃 ちま
お白い門侍さあどのおづのふらなるにま

陸の志平乃きこゆるふきかたを親トて崎の
と名のりゆも何千ともと何ふ年のびらむ
と何り水とちるるのをつげたる之なるや妻帯
さを崎と見たる附合之

おぼろの 鳩乃 藤 所の 月
ものいば本意ふひく 春乃 風

はきこえたるのこころ
櫛を おきむる 崎の 何らせ
おをたよりなき志を 化粧らむ
附ごろ人を埋める 崎の 何れおとす

幼おのねくを 見くより なき志ふおの
おきくくうつし げふけりやういらいぬり
なるふ中くふかちの 此のまはるあふ
へふや

お立しめむ 扇を 懐ふ 生きて
月内へ 湊き 陣中 の 市

お白お立しめて 料理をなす 扇を 懐ふ
いけをくく 懐向むご 此なるや 志を
巻のふふ何らむ 陣中の 志おとす
はたこらたこ

小神 袴を 贈る 戒の師

わがぼむの母ふ似たるもゆりて

赤子のヒユヤ戒に小神袴まで戒師よりた

ままあるこかゝるおちどよつぐとてい

わがぼむの顔の母ふ似たるがゆりて人結

をつくきる附合あり

赤子の衣持つとてたる古今集

花に射きくは坊の酒ツカ

前白いろのもあつらはにさきく古今集も

何るぞし附どろろハそのたを集ちち

たるハ赤子の坊と見く花の流小坊の酒ツカ
をひらく

蚕コだぬ糸きくハ帛ヒもヒ

縁本をつくりて古た衣を見む

蚕コ羽さるふをみちのくとヒひヒをてい

一のぬく縁本つくりて古き世の衣乃

はまを見くたといふ附合あり

眠カゲくハヒのヒゆヒふヒきぬヒ

百里の旅を本曾の牛追

目筋のヒ結

豆くくぬ杖ハ何とちかく鬼
吉州前を寺ふたうとる ヒツダブキ 松皮サ喜

吉州不夜さにぬいたらむいさハめくもの
まどく思もあくらむおの白ハ節ハの杖の
外ハ思ハ何といふてあくらむくの借杖
月見よと引起さぬく恥一き

髪ハ何ふがさる ウスモ 藤の ちあ
前向者よりあたる人をさばりりど
たあきものうとびり 起く月をも見ぬ入
くといはまりたとはぬるが 恥一きと

後向やどと来た人と見くのでたきはま
をつけるる

白的場のま干 咲る山吹

春を種一七ツの季乃ちうら石

七ツの季乃ちうらためしふ引とる石のを
とあふぬりても忘れを思ひ出さ存あへ
一ちうら石的場の何とけい何とべとけま
なりよとべくかふるのハ衣家よハめくあ
るの的場とつあよくつけり
かき消るよなハ聖中の地花よて

つりてさるる山たのき年

前白ハ姓中の地蔵の妻ふまゝくはてし
階層あり後白ハ姓宿たど一たると
見くくの附合之

鳴子松、ろく片、殺の定

盗人ふつれそふ姓が力を位て

前白ハよのつぬれ田舎のはまなるを川
橋トく盗人の宿の鳴子ふまゝへたるつけ
向ありあゝるならん盗人の妻とありて
身をくやゝあるとる何れむべし

秋の墨待の宿 徧ハ後

ものいハ小いふ顔をたしい

前白徧徧に秋の墨待かきたる風流の
まぐさたりふまゝなる人乃面釈ありてた
しふ後ともけりかゝきやうまを後白ふ
てハまでたものいひけりまゝとふまゝ人
りしゝまづし小いふ顔がしりてまらぬ
かふもてありたむくはまこ

盗人といはた二十の里

松の根小茂をたあらべくまらむ

前句何となく水どとろくの里といふ名
のやしたふ盛人のをるべきふとくゆ梅句ハ
きなはちろのたろろししたふよふ十六歌をど
いふもの、陸宿してことふ大とりのねとい
ふよて一しふといきやうき見えたり
何の月も意ゆ意ふとろ然しん

衣をききえぬ袖のいとき
意のまをききえぬといふ月を
ころ月を見てもかたしんといふ月を
ききえぬといふいとかほ

衣をききえぬ世の中

酒のめバ谷の朽本も 佛あり

句の朽もてハ衣をもちききえぬものゆもなま
ハぬをききえぬの証候と見く酒に研
たる目よハ谷の朽本も佛のやうにみよと
いへる附合たふ水ど意どろろハ衣をききえ
世の中をききえぬといふハもと心何
をききえぬといふハつりりねどたること朽本
佛ありといふは妙くの中段たるべし
洞の地は花ふら純る。みん

甘香の菊ハ穂の泪や染つらむ

山陰 葛 翠

冬を隣りく流人果刈

らふも又昨日をおむ石のうへ

まこととふけつけ白涙を流まへとりむと

まればかへつく意成換ムふくモク跡ミヤ後ま

登

西の山に松の影をみれば

芭蕉公羽附合集評注上巻終



